

463

特279

379

大川周明著
日本言行

特279-379



*76W10987 *



始



主義

一、神武建國の精神を宣揚し、誠忠を皇室に誓ひて神聖なる國體を無窮に護持し、天業を四海に恢弘するの覺悟を堅確にして先づ有色民族の解放及び指導に任じ、更に世界の道義的統一に向つて勇往邁進す。

綱領

- 一、日本建國の精神、日本國家の本質、及び國民的理想を闡明し、本末主客を顛倒せる形式的教育の弊風を改革し、眞個の日本國民を育成すべき皇國的教育組織の實現を期す。
- 一、天皇親政の本義に則り、黨利を主として國策を從とする政黨政治の陋習を打破し、億兆心を一にして天業の四海に恢弘すべき皇國的政治組織の實現を期す。
- 一、一君萬民の國風に基き、私利を主として民福を從とする資本主義經濟の搾取を排除し、全民の生活を安定せしむべき皇國的經濟組織の實現を期す。

神武會本部

大川周明著

日本的言行

神武會藏版



はしがき

茲に『日本的言行』と題して刊行する小冊は、過去數年に亘り、各地に於て試みたる幾回かの講演の要約である。予は本書の八篇のうちに含まれたる思想を、いろいろなる會合に於て、いろいろなる題目の下に講演した。講演は總て草稿なしに試みたが、講演終りて後に其の内容を想起しつゝ自ら筆執りて之を再現し、多くは之を吾等の機關たる月刊日本の誌上に發表した。いま之を一巻とするに當り、各篇に若干の雌黃を加へ、且つ出來得る限り思想の內面的順序に従つて之を配列し、吾等の抱く日本主義の少くとも外廓だけは彷彿せしめやうと努めた。

國家主義・國民主義を奉ずる者に對して挑まるゝ議論は、常に下の如きものである。曰く『人は第一に人間であらねばならぬ、人間たるの根本が立つて、初めて國民たることも出来る。それ故に日本國又は日本人といふことに固執するのは、決して眞個の人間となる所以でない』と。此の主張は、一見甚だ道理あるが如く見えて、實は抽象的斷見に陥れるものである。試みに問ふ、いづれの處にか櫻に非ず、梅に非ず、牡丹に非ざる『花』があるか。花は一個の理念としては存在する。而も此の理念は、必ずや櫻・桃・梅・菊等の特殊の花として咲き出づることによつて、初めて實在となるのである。それ故に梅花は、梅花として咲く以外に、決して花たることが出来ない。梅花として咲くことによつて、花の理念が初めて實現せられ、花の花たる所以が發揮される。こは正しく人間

76W10987



の場合に於ても同然である。

拒むべくもなき事實として、一切の人間は必ず孰れかの國家又は民族の一員として生れて来る。日本人に非ず、支那人に非ず、米國人にも非ざる『人間』は實在としては決して存在しない。それは唯だ一個の理念として存在するだけであり、而して此の理念は必ず民族又は國民として實現される。故に日本人は日本人として、米國人は米國人として、それらの面目を發揮することが、取りも直さず人間の面目を發揮することとなる。従つて眞個の國民となりてこそ、初めて眞個の人間となり得る道理である。此の順序を誤るのは抽象的論議より來る顛倒の見である。吾等日本國に生れたる者は、第一に日本人であらねばならぬ。本書の八篇は、實に、此の簡單明瞭なる論據に立ち、如何にして眞個の日本人たり得るかを考察せる予の努力の一端に外ならない。

昭和五年一月

大川 周明

目次

第一 日本的言行	
一 太宰春臺と本居宣長	二
二 道そのものと道の説明	四
三 聖人の教と祖先の遺風	七
四 日本的自覺の確立	九
第二 洋意の出離	
一 『洋意を去れ』	二
二 明治日本の歐化主義	三
三 知識階級の歐米崇拜	七
四 現代改造論に潜む洋意	三
第三 大化革新の回顧	
一 危険思想としての儒教	六
二 大化革新の思想的背景	三〇
三 復興せられたる日本精神	三五
四 非日本的諸相	三九
第四 何故に國史を學ぶか	
一 歴史の意義	四
二 現代の國史無視	四
三 日本書紀	四

四 國史と國家……………	五〇
第五 國史による日本精神の把握	
一 象徴としての正倉院……………	五五
二 日本精神の兩極性……………	五九
三 日本精神の偉大性……………	六三
四 皇統一系の内面的意義……………	六五
第六 興國運動の原理	
一 世界戦の意義……………	六六
二 レニ……………	六九
三 ガンデイ……………	七二
四 ケマル・パシヤ……………	七三
五 日本に起るべき運動……………	七六
第七 復興せらるべきものは何ぞ	
一 『敏感なる國土』……………	七九
二 震災後の『文化日本』……………	八二
三 歐米模倣の最期……………	八四
四 眞に復興せらるべきもの……………	八七
第八 軍人と政治家よりの教訓	
一 武門政治の國家的寄與……………	九二
二 軍人と政治家との分化……………	九三
三 現代政治の墮落……………	九四
四 政治家としての鍛鍊……………	九五



日本的言行

第一 日本的言行

一 太宰春臺と本居宣長

『日本には元來道といふこと無之候。近き頃神道を説く者、いかめしく我國の道とて高妙なるやうに申候へども皆後世に言ひ出したる虚談妄説にて候。日本に道といふこと無き證據、仁義禮智孝悌の字に和訓なく候。凡そ日本に元來有る事には必ず和訓有之候。和訓なきは元來日本に此事無き故にて候。禮儀といふこと無かりし故に、神代より人皇四十代のころまでは、親子兄弟叔姪夫婦になり給ひ候。その間に異國に通路して、中華の聖人の道此國に行はれて、天下の萬事皆中華を學び候。それより此國の人禮儀を知り、人倫の道を覺悟して禽獸の行ひをなさず、今の世の賤き輩までも、禮儀に反く者を見て畜類の如く思ひ候は、聖人の教の及べるにて候。日本の今の世を見るに中華の昔に及ばずといへども、天下は全く聖人の道にて治まり候と存じ候。日本はまた殊に小さき道にて政を助くること能はず、畢竟諸子百家も佛道も神道も、堯舜の道を戴かざれば世に立つこと能はず候。』

此の驚くべき言葉は、太宰春臺の著せる『辨道書』の一節であります。異邦崇拜は今日の日本に於ても甚しくある。而もキリストを崇拜し、マルクスを崇拜し、レニンを崇拜し、ガンディを崇拜する當今の日本人と雖ども、恐らく太宰春臺が徹底して堯舜を崇拜せるには比ぶべくもないと思はれます。ひとり春臺のみならず、徳川時代の儒者は、若干の例外を除けば、概ね春臺と五十歩百歩の支那崇拜者であつたのであります。

是くの如き時に當り、賀茂眞淵・本居宣長・平田篤胤等の國學者が、一代の中華心醉に宣戰して、日本思想の闡明、日本精神の確立に心砕けることは、吾等をして雄風を今日に仰がしめるものであります。わけても異邦崇拜のこゝろ、深く國民の魂に巣くひつゝある今の世に、日本主義を奉じて屹立せんほどの者は、常に感激の泉を此等先賢の精神に汲むとことを忘れてはなりません。

本居宣長は、當時の儒者が支那の經史詩文を學びつゝ、却つて皇國のことに無知なるを指摘して下の如く言つて居ります——『儒者に皇國の事を問ふに知らずと言ひて恥とせず、漢國の事を問ふに知らずと言ふをばいたく恥と思ひて、知らぬ事をも知り顔に言ひ紛らす。そは萬を漢めかさんとする餘りに其身をも漢人めかして、皇國をばよその國の如くもてなさんとするなるべし。されどなほ漢人にはあらで御國人なるに、儒者とあらん者の己が國の事知らであるべき業かは。たゞし皇國の人に向ひては、さあらんも漢人めきてよかんめれど、もし漢國人の問ひたらんに、われはそなたの國の事は能く知れども吾國の事は知らずとは、さすがに得云ひたらじをや。もしさ云ひたらんには、己が國の事をだに得知らぬ儒者の、いかでか人の國の事をば知るべきとて、手を拍ちていたく笑ひつべし。』

此の警告は移して直ちに今日の歐米心醉者に加へらるべきものであります。徳川時代に學問と言へば漢學のことなりし如く、今日に於ては横文字のみが眞理の庫を開く鍵なるかの如く考へる者が居る。歐米の事とさへ言へば、巴里の横町の小料理屋の話までが、誇るべき知識とされて居る。而して神武紀元何年なるかを知らなくとも、些かの恥ともされて居ない。西洋の社會史は研究されるけれど、日本社會史の研究は少數専門家の手に委ねて顧みようもしない。社會の進化乃至改造を論ずる者も、西洋の社會と日本の社會との異同をさへ明かにせんとせず、直ちに西歐學者の唱ふる原理を日本にも適用せんとする。マルクスの思想を眞理なりとして、之を立證するために引用し來るものは總て西洋の歴史であります。試みに『マルクスの原則に従つて日本史を説明せよ』と設問すれば、日本の歴史は之を知らずと答へて平然たる爲態であります。外交上の論議に於ても、例へば米國の邦人移民排斥を論ずるに當り、ひたすら同胞の米國に於ける行動の非を擧げて、米國の立法の止むを得ざるを辯護する學者が少なくありません。まことに『皇國をばよその國の如くもてなさんとする』者であります。吾等は斷乎として此の主客顛倒を改めねばなりません。而して總て日本的に思ひ且行はねばならぬと存じます。

二 道そのものと道の説明

太宰春臺が日本に元來道なしと主張したのは、事實と説明とを混同せるもの、一層詳かに言へば『道そのもの』と『道についての教』とを混同せるものであります。此點に關しては、平田篤胤が

其著『入學問答』の劈頭に説くところ、實に其妄を論斷して適切無比であります。彼は下の如く言ふ——『一體眞の道と申すものは、實事の上に備はりあるものにて候を、世の學者はとかく教訓の書ならでは道は得られぬことのやうに心得居り候へども、甚だの誤りに候。その故は實事があれば教はいらず、道の實事無きが故に教は起り候なり。されば教訓と申すものは實事よりは甚だ卑きものに御座候。老子の書にも大道廢れて仁義ありと申候は、こゝをよく見ぬき候語に候。』

まことに篤胤の言の如く、春臺が日本に道なかりしとせるは、道の説明なかりしを道そのものが無かりしと速斷せるものに外ならぬ。吾等の祖先は常に自ら『言擧げ』せぬことを誇りとし、徒らに議論多き支那人を『言さへく唐國人』として蔑しんで居たのであります。かゝる祖先が、道徳に關する論議後世に遺さざりしを見て、直ちに道徳的意識なかりしかの如く考ふるは、驚くべき斷見と言はねばなりません。吾等の祖先が如何なる生活をして居たかを知るためには、祖先の言論に非ず其の行動を見ねばならぬのであります。

而して吾等の祖先の行動は、些かも包み隠すところなく、古事記・日本書紀、乃至萬葉集等の古典に書き残されて居ります。吾等は此等の古典を通じて、吾等の祖先の生活が、常に春臺の言の如き非道徳のものならざりしのみならず、實に雄渾莊嚴なりしことを認めざるを得ませぬ。吾等の祖先は、自ら『天の益人』と稱へて、崇高なる自尊の念を抱いて居たのであります。天の益人とは、天意を奉じて彌榮を行く民の意味で、取りも直さず天意を地上に實現すべき使命を荷へる民の意味

であります。天は即ち神であります。神は即ち至高の理想であります。而して至高の理想の具現者は皇祖皇宗であり、天皇は即ち皇祖皇宗の延長に亘らせられる。故に天意を奉ずるといふことは、天皇の大御心を奉ずることに他ならないのであります。かくて天皇の大御心を奉ずる日本國民が、一人でも多くなれば夫れだけ至高の理想が地上に實現されて往くといふのが、實に吾等の祖先の自覺であり自信であつた。之を今日の吾が同胞が、歐米の人口論に魂を奪はれ、人口過剰などと唱へて日本民族の繁殖を却つて持餘して居るのに比ぶれば、その意氣の差は天地雲泥の如きものありと言はねばなりません。吾等の祖先は晴れたる空の如き朗かなる心を以て生活し、常に『清き明き心』を有たんとし、常に『天晴れ』の氣持を失ふまいと努めて居ました。これは公明にして雄大なる理想を奉ずる者のみが能くすることでありませぬ。

彼等の祖先は、是くの如き理想と自信とを以て日本國の建設と經營とに従つたのであります。而して此の態度と精神とは、戰爭の場合に於て最も顯著に現はれて居ります。彼等の戰爭は實に『まつろはぬ』ものを『まつろはず』ために他ならなかつた。まつろふとは祭り合ふこと、即ち同一の神を尊崇すること、従つて同一理想を奉ずることでありませぬ。彼等は曾て私利貪婪の心を以て戰はなかつた。彼等が其の誇りとせる細戈——精銳なる武器を執つて起つたのは、實に同一理想を奉ぜざるものをして、彼等の理想を奉ぜしむるためであつたのであります。それ故に如何なる敵といへども、一度びまつろひさへすれば、悉く吾が同胞となり、相携えて至高の理想を實現するために精

進することが出来たのであります。かくてこそ吾等の祖先は、天壤と共に彌榮え行く國家を建設し得たのだ。是くの如き國家を建設せる其事が、何よりも雄辯に祖先の莊嚴なる生活を物語るものであります。それは『道といふこと無かりし』民の決して能くするところではありませぬ。さらば吾等をして再び本居宣長の言を引かしめよ——

『皇國の古は、さるこちたき教も何も無かりしかど、下が下まで亂るゝことなく、天が下は穩かに治まりて、天つ日嗣いや遠永に傳はり來ませり。さればかの異國の名に習ひて言はゞ、これぞ上も無き優れたる大道にて、實は道あるが故に道てふ言なく、道てふ言はなけれども道はありしなり。そを事々しく言ひ擧ぐるを然らぬとのけぢめを思へ。言擧げせずとは、異國の如くこちたく言ひ立つることなきを云ふなり。譬へば才も何も優れたる人は言ひ立てぬを、なま／＼のわる者ぞ、反りていさゝかの事をも事々しく言ひ擧げつゝ誇るめる如く、漢國などは道乏しきが故に、かへりて道々しきことをのみ言ひ合へるなり。』

三 聖人の教と祖先の遺風

東西の歴史が明瞭に示す如く、一教一派の祖師は常に混沌亂離の世に出現して居ります。老子が道破せる如く、仁義の教は大道の廢れたる時に興り、宣長が指摘せる如く、道なきところに却つて道々しき言擧げが行はれるのであります。孔子も釋尊も基督も、皆な亂世か亡國か、然らずば衰世に生れて居ります。彼等は道なき世に生れ、人々が道を行はざりし時に、之を正しき道に復歸せし

めんと努めた偉人であります。それ故に彼等は、謂はゞ魂の醫者であり、其教は病める魂の藥であります。それは藥であるが故に決して糧食ではない。基督は、右の頬を打たれたら左の頬をも出せと言ひ、上衣を取られたら下衣をも與へよと教へて居ります。それは當時の猶太人が、それほど激越に戒しめなければ尋常の人間に立歸らぬほど、貪婪苛酷になつて居たからであります。釋尊の説くところは一層嚴酷であり、實に結婚をさへも成道の妨げとして居ります。それほどまでに戒しめねばならなかつたのは、當時の印度人が性欲的に激しく放肆であつたからであります。孔子の教は兩者に比べて遙かに穩當ではあるけれど、尙且禮儀三千威儀三百と説いて居ります。それは春秋戰國の亂離に亡び去らんとせる周代文化を、如何にもして護持せんと苦心せるが故に外なりません。かくて此等の教は、吾等の精神のための藥であり、吾等の魂の病は之によつて癒やさるゝが故に、固より謝恩の心を抱いて之に對さねばなりません。さり乍ら吾等は、之を以て日々の糧と思ひ違へてはならぬ。此等の教訓は決して一々守らるべきものでない。若し強いて守らうとすれば、現實の生活との間に矛盾枵格を來たし、必然に無理を生じて偽善に陥ります。吾等は眼前幾多の例證を、牧師や僧侶の生活に於て見て居ります。

されば吾等の生命の糧は、決して聖人の教に非ず、實に祖先の遺風であります。祖先の遺風を守ることが、取りも直さず健全なる日本國民の生活であります。吾國の古典は、教を説かずして遺風を傳へて居る點に於て、吾等の生命の糧として無比の寶であります。孔子が一卷の教訓書をも遺さ

ず、唯だ春秋を著はせることを思へば、孔子の本旨もまた恐らく祖先の遺風を傳へんとするに在つたのであらうと思ひます。さればこそ『わが志春秋に在り』と言ひ、また『我を知る者はそれたゞ春秋か、我を罪する者はそれたゞ春秋か』と言つて居るのであります。然るに支那に於ては、孔子の此の眞意が充分に會得せられず、却つて其の『教訓』のみが持擯されて來たのであります。

四 日本的自覺の確立

吾等は決して異邦思想乃至文明の攝取を拒むものでありませぬ。嘗に拒まざるのみならず、聲を高くして之を主張するものであります。唯だ吾等の極力戦はんところは、魂を異邦精神に賣ること、換言すれば本末主客を顛倒し去ることであります。日本歴史が最も力強く教ゆる如く、國民的自覺が強烈であり、日本精神が堅確に把持されて居さへすれば、外來一切の思想文明が、常に國民的生活の向上充實に寄與し來れるのみならず、其等の異邦文明並に思想は、吾等の精神に統一せらるゝことによつて眞個の意義と價值とを附與されて來たのであります。之に反して國民的自覺鈍り、日本精神の動搖を見る時は、曾て國民に貢獻せし同一外來思想並に文明が、常に却つて災厄の因となつて居ります。故に禍福は彼にあらずして吾に在る。例へば現代日本の政治と軍事とを比較するが宜しい。共に同一日本國民が、等しく歐米の制度に倣つてやつた仕事でないか。然るに一方吾が陸海軍は世界に誇るべき成績を擧げて居るのに、他方吾國の政治は言語道斷の不始末であります。吾等は此の相違の由來するところを切實深刻に反省せねばなりません。これには大小幾多の

原因が重疊して居るであらう。而も其の最も根本的なるは、實に日本精神を把持すると否とに在ります。若しくは其の強弱に由ります。今や日本は其の独自の精神に復歸して、一切を純乎たる日本的立脚地から批判せねばならぬ時となつた。經濟上の組織も、政治上の制度も、社會的の施設も、悉く行詰つた。之を打開して新路を開拓するためには、異邦的に考へ且行ふことを許しませぬ。實に純乎として純なる日本的思索と日本的行動とに俟たねばならぬと信じます。

第二 洋意の出離

一 「洋意を去れ」

『漢意とは、漢國のふりを好み、かの國を貴ぶのみをいふにあらず、大方世の人の萬の事の是非善惡を論ひ、物の理を言ふ類、すべてみな漢藉の趣きなるいひなり。さるは漢藉を讀みたる人のみ然るにはあらず、書といふもの一つ見たること無き者までも同じことなり。そも漢藉を讀まぬ人は、さる心にはあるまじきわざなれども、何わざも漢藉を善しとして、彼を學ぶ世の習ひ千年にも餘りぬれば、おのづからその意世に行き渡りて、人の心の底に染みつきて、常の地となれる故に、我は漢意もたすと思ひ、これは漢意にあらず當然の理なりと思ふことも、なほ漢意を離れ難き習ひぞかし。そもそも人の心は皇國も外國も異なることなく、是非善惡に二つなければ、別に漢意といふこと有るべくもあらずと思ふは、一わたり然る事のやうなれども、しか思ふも漢意なれば、此の意は除り難きものになんありける。人の心の何れの國も異なること無きは、本の眞心にこそあれ、漢藉にいへる趣きは、みな彼の國のこちたきさかしら心もて、偽り飾りたる事のみ多ければ、眞心にあらず。彼が是とすること實の是にあらず、非とすること實の非にあらず類も多ければ、是非善惡に二つ無しともいふべからず。また當然の理と思ひ取りたる意も、漢意の當然の理にこそあれ、

實の當然の理にはあらざること多し。大方これらの事、古き書の趣きを能く得て、漢意といふものを取り去りぬれば、おのづからいとよく分ることを、おしなべて世の人の心の地、皆漢意なるが故にそれを離れて悟ることのいと難きぞかし。』

この本居宣長の言葉は、徳川時代の止度なき支那崇拜に對する痛烈なる警告であります。徳川幕府は、幾多の動機から熱心に儒教を奨励しました。そのために徳川時代に於ては、學者といへば漢學者、學問といへば漢學を意味するほど、儒者が盛んになつたのであります。儒教が盛んになれば孔孟が崇拜されるのは言ふまでもない。而して之に伴ひて總じて支那のものを尙ぶ傾向を生むのもまた止むなき徑路であります。かくて徳川時代の儒者のうちには、支那を中夏と尊崇し、吾國を東夷と卑下するものさへ少なくなつた。太宰春臺の如きは、孔孟の教が傳へられるまで、日本人は禽獸の如き無道德の生活を營んで居たとさへ極言したのであります。

かくの如き時代に於て本居宣長が、漢意を去れと高唱したことは、非常なる卓見といはねばなりません。漢意を去れとは、取りも直さず日本精神に復れといふことであります。宣長以前に於ても國學者荷田春海は

ふみわけよ大和にはあらぬ唐鳥の

跡を見るのみ人の道かは

と詠じて、荻生徂徠一派の支那崇拜を排撃し、加茂真淵もまた太宰春臺の妄論に憤激し、名高き『國

意考』を著はして日本古道の莊嚴を力説し、中華至上主義を論難しました。而も此の古學運動の機運を受けて、之を集大成したのが實に本居宣長であり、此の思想を抱いて街頭に善戦し、日本精神の確立に心を碎いたのが平田篤胤であります。此等の偉人の輩出によつて、これまでは學問と言へば漢學を意味して居たのが、皇國本來の思想文學を研究する學問が、和學又は國學の名に於て、初めて漢學と拮抗するやうになつたのであります。

さて今日の吾國には、最早徳川時代の如き支那崇拜が影を潜めてしまつた。嘗に影を潜めたるのみならず、支那の善なるものさへも無視して、之を侮蔑する傾向になつて來ました。今日の日本は支那を去つて歐米についたのであります。而して當時の儒者に劣らぬ多くの歐米崇拜者が、吾國の思想界に時めいて居ります。吾等は本居宣長が、徳川時代の思想界に向つて『漢意を去れ』と警告せる如く、現代日本の思想界に向つて『洋意を去れ』と警告せんと欲するものであります。今日の日本人は、宣長の言葉そのままに、西洋のふりを好み、西洋を貴ぶのみならず、總じて西洋的に思ふし處斷せんとして居ります。歐米の書籍を讀まぬ人すら、かくの如き雰圍氣の中に在るが故に、知らず識らず西洋的に思ひ且行はんとして居ります。まことに『おしなべて世の人の心の地、みな洋意なるが故に』之を離るゝことは至難のわざとなつたのであります。

二 明治日本の歐化主義

日本の歐米崇拜は、明治維新のかたのことでもあります。もと明治維新は儒教の大義名分の思想

と、國學によつて闡明せられたる國體觀念の把握とが、思想的根據となつて行はれたる改革なりしとは言へ、愈々幕府を倒して天皇を中心とする政治を行はんとするに當りては、今更支那の制度に倣ふべくもなく、さりとて上代日本の制度を其儘に復活すべくもない。それ故に明治維新の指導者が、今や新たに交りを結んで強大恐るべきを知る歐米諸國を模範とし、制度文物みな之に則らんとせることは、固より當然の徑路でありました。彼等は日本を富強ならしむるためには、西洋文明を取り入れる外に別途なしと考へたので、徹底せる日本の近代化、又は日本の西洋化に着手したのであります。

それは實に驚くべき急激なる變化であつたと言はねばなりません。維新以前僅に十五年、ペリーの黒船が初めて浦賀に來りし頃まで、國民は西洋人を野蠻視して居た。當時の錦繪や草双紙には、犬の如く片脚あげて放尿せる西洋人の姿を描いて居たほどであります。その西洋人が暴力を以て開國を強要せる故を以て攘夷運動が激成せられ、開國を迫られて承認せるを許すべからずとして倒幕の氣勢揚がり、遂に皇政復古の世となつたのであります。然るに今や昨日まで攘夷倒幕に無我夢中なりし志士が、君子豹變して歐米文明の隨喜者となり、日本の歐米化に死力を傾倒し初めた。わけても當時歐米を巡歴せる人々は、その事々物々に驚駭魂魄して、日本は果して彼等と伍して獨立を保ち得べきか否かをさへ憂ふるやうになりました。木戸孝允の如き、歐米を一巡して特に此憂を深くし、歸來極度の神經衰弱に陥つたと傳へられて居ります。福澤諭吉の如きも、また日本の獨立を危

ぶめる一人でありました。

日本は米國の強要によつて開國したのであるが、當時の日本は國力弱かりしために、極めて不利なる條約を歐米各國と結ばざるを得なかつたのであります。この不利なる條約を改正して、歐米諸國と對等の交際をなすためにも、日本を歐米諸國の如き『文明開化』の國たらしめねばならぬといふことが、明治政治家の切なる念願でありました。而して文明開化の民となるためには、政治法律はいふまでもなく、産業の組織、教育の制度、みな悉く歐米に倣はねばならぬと考へました。明治初年に日本の教育行政を擔當せる森有禮の如き、日本語は文章としては意味曖昧、口語としては演説に適せずとの故を以て、之を廢して英語に替へるがよいと考へて居た。實に日本の言語までが、當時の政治家によつて斥けられんとしたのであります。

事情かくの如くなるが故に、明治初年の吾國の教育方針は、國民を西洋人に造り變へることを主眼としたと言ふを妨げませぬ。現に文部省が最初に全國に造りしものは英學校であり、英學校が後に師範學校となつたのであります。予は昭和二年夏、岩手縣に赴きました時、盛岡師範學校最初の校長の教育方針を、當時學生たりし土地の故老に聞くことを得ました。此の故老の語るところによれば、校長は西洋の學問をするためには衣食住をも洋風にしなければならぬとして、五十前後の初老の婦人教師にまで洋服を強ひ、生徒には洋食を食はせたとのことです。但し其の洋食は、生徒が食ふに堪えずとして強硬に抗議せしため、後には和食に改めたとのことであつたが、こは當

時の教育方針を物語る絶好の一例であります。森有禮は是くの如き教育によつて教師を養成し、全國に小學校を立て、國民に無教育者ならしめんと努力したのであります。

當時の國民の知識状態を顧れば、政府が焦慮したのも無理なかつたと思はれます。徴兵制度を布いて國民に血税の義務を教へれば、血税とは文字通り血を絞ることと考へて一揆を起こした。田畑に電柱を立てると、偶々其年が凶作であつたので、罪を電柱に歸して之を抜き棄てた。初めて戸籍調べを大阪で行つた時は、之を以て未婚の少女に西洋人の人種を植えつけるためだとして、十二三歳の少女にまで御齒ぐるを着けさせた。小學校を立てると、それよりは眞宗の説教所がよいと言つて騒動を起こした。宛として今日の支那の田舎に見る知識程度であります。當局が焦慮したことに何の不思議もない。かくして一日も早く同胞を文明開化の民たらしむべく、しきりに各地に學校を立てたのであります。

一體學校は、教師ありて然る後に校舎あるべきものであります。然るに吾國に於ては、此の順序を顛倒するのを常として居ります。今日でさへ學校の新設に際して、第一に考慮されるものは金であり、最後に考慮されるのが教師であります。それ故に眞に良い教師を得るのに困難して居るが、明治初年に於ては尙更のことであります。學校は立てたものゝ教師は容易に得らるべくもない。出來得るならば同胞を西洋人に育て上げる教師を、日本の津々浦々に配りたいのが當局の希望であつたらうが、これは當時に於て到底不可能のことであつた。かくて止むなく舊藩の學校の先生、學問

ある士族、乃至は寺の住持や村學究などを、校長なり教師なりに採用した當面の急に應じたのであります。これは政府としては不本意であつたとしても、日本のためには眞に幸福なことであつた。若し政府の希望せる資格を具へし教師が、全國に於て一齊に同胞を西洋人たらしむべく教育したとすれば、今日の日本人は如何なるものになつて居たか。幸にも此等の村學究先生は、政府當局とは事變り、毫も西洋を尙び又は恐れることがない。彼等は紅毛碧眼の徒を眼中に置くことなく、専ら漢學又は國學を以て鍛えし舊き思想を少年に鼓吹し、日本は神國であり、文明國は支那のみなるかの如き思想を、純眞なる少年の頭腦に刻み込んでくれた。これは日本に取りて思ひ儲けぬ幸運であつたと言はねばなりません。中央政府が飽迄も日本を第二の歐米たらしめる方針を以て進み、國民生活の一切の方面を歐米化せんと努めたるに拘らず、國民が能く日本的自尊と自覺とを維持し得たのは、外面的には日清日露の兩役によつて強烈なる國民意識を喚起されたのであるが、内面的には此等の老先生に負ふところ最も大であります。

三 知識階級の歐米崇拜

日本は明治政府の努力により、とにもかくにも歐羅巴が其の實現のために三世紀を要せる文明を僅々半世紀の間に習得しました。それは或は皮相を學び得て骨肉に達しないとも言へるでありませう。さり乍ら少くも當座の役に立つまでに歐米文明を採用し得たことだけは事實であります。かくて先づ日清戰爭に勝ちて世界諸國と對等の地位を占め、次で日露戰爭に勝ちて、一躍強國の班に

入り、更に世界戦争に僥倖して世界三大強國の一となり得たのであります。是くの如き國際的躍進は、主として西洋文明の攝取によると考へ來れば、國民の間に歐米崇拜の念が高まるのも、また當然至極と言はねばなりません。加ふるに明治初年には政府當局こそ崇拜の旗頭であつたとは言へ、國民は地方の老先生から日本的乃至東洋的精神を鼓吹されて居た。然るに今や大學又は師範學校に於て、西洋至上主義の教育を受けたる教師が次第に其數を増して來たのであります。此等の新しき教師が老先生に代つて國民を教育するに及び、西洋崇拜の傾向は全國的になつた。高き教育を受けた者ほど、歐米心酔の度が高くなつた。この新興知識階級は『歐米のものは皆善し』と思ふやうになつて來たのであります。

これを私自身の經驗に顧みましても、私の中學時代に於て國語漢文の教師は、常に英語教師よりも重んぜられなかつた。英語の授業時間は他の學課に比して法外に多かつた。高等學校時代に於ても、英獨語學の時間が殆ど自餘一切の課目の時間と匹敵するほどであつた。英獨の最も通俗低級の雜誌を讀んでさへ、恰も英獨文學の研究なるかの如く同窓に誇り得る有様であつたのであります。當時私は主として哲學宗教に關する書籍を貪り讀んで居たのであります。其頃の哲學者思想家と言はれし諸先輩は、概ね力を歐米思想の紹介祖述に傾け、日本思想に關する學術的論文の如きは、絶えて無くして稀に在るに過ぎなかつたのであります。其等の學者の總てを包む雰圍氣は、恰も徳川時代の儒者が支那を尙びたると同じく、西歐殊に獨乙哲學に對する崇拜の念であつたのであります。

す。

私は今日尙ほ明瞭に記憶して居ります。井上哲次郎博士の著書に、徳川時代の儒者の思想を紹介せる三冊の本があります。博士は其本の中で、西洋哲學者の名には皆な『氏』を附けて、ソクラテス氏、スピノザ氏、カント氏、ヘーゲル氏などと呼び、日本の儒者は伊藤仁齋、山鹿素行、荻生徂徠と、總て呼捨てにして居ります。また日本の學者の思想を批判するのに、例へば徂徠の政治論はホッブス氏の思想に似て居る、それだから偉い。仁齋の理氣一元論はパウルゼン氏の精力説に似て居る。それだから偉いといふ風に、すべて西洋思想が判斷の標準となつて居ります。井上博士の名は、今日の青年に對してこそ何の權威もないが、私の青年時代には異軒先生と言へば哲學界の第一人者として重んぜられて居たのであります。その學者の態度が既に是くの如しとすれば、吾々青年が眞理は横文字の中のみ潜めるかの如くに考へたことも、また無理ならぬ始末であります。

かやうな次第でありますから、私の學生時代には、東洋殊に日本思想を叙述せるものに眞個學術的名に値する著書がなかつた。私の知る限りに於ては、村岡典嗣氏の『本居宣長』を唯一の除外例とし、其他は説明して核心に觸れず、叙述して體系を成さず、唯だ西洋哲學に倣つて形式的組織を立て古人の著書より抜抄せる章句を之に従つて羅列しただけのものであつた。井上博士の諸著の如き、當時に於て異類出色のものであります。ついに此例に洩れなかつたのであります。私は哲學を學ぶ者の義務として、一應は諸書を涉獵しましたけれど、私の若き魂は殆ど何等の感激を

も之によつて與へられなかつたのであります。

加ふるに當時の吾國には、パーレーの萬國史、又は十八史略に比すべき日本史がなかつた。その學術的價値は固より論外であります。パーレーの萬國史は小説を読む興味を以て之を讀了させる魅力を有し、十八史略に至つては少年をして血湧き肉躍らしめるに足るものがあります。然るに私は日本史に斯様な著作を探り得なかつた。竹越與三郎氏の『二千五百年史』は希有の好著でありますけれど、青少年の讀物としては大部に過ぎて居ります。其他のものは徒らに考證に追はれし専門家にのみ必要な史書か、然らずば政治的事件の個條書に類し、唯だ地名人名年代の羅列を以て若き記憶を苦める教科書的の國史のみでありました。この國民全般の好讀物たるべき日本史なかりしことも多くの青年をして日本其者に無關心たらしめた一因と存じます。かくて日本の知識階級は専ら歐米の思想文明を謳歌して來たのであります。

私は最近『國史回顧會』に於ける三上文學博士の講演筆記を讀みまして、實に驚くべきことを更に知り得たのであります。博士の講演によれば、明治十六年に大學豫備門で一週一時間新井白石の讀史餘論を教科書に用ゐるまで高等學校程度の學校に於て國史を教へなかつたといふことであり、而も此時に國史を教へるやうになつたのも、一獨逸人教師の忠告によれるものだといふことであります。博士の此の講演は、右の外にも明治初年の教育に關する大切な事柄を述べて居られますから、前節と重複の嫌ひもありませんが、其の一部を特に下に引用させて戴きます。

『然るに王政復古後の我國の政治は御承知の通り攘夷の時代から急轉直下して外人崇拜時代となりました。これは攘夷といふ事に裏面の意味のあつたにも由りますが、要するに既に國是を一變して世界の列國と交際し其文物制度を採用することになつたからであります。即ち五箇條の御誓文の一に廣く知識を世界に求めらるゝ意味のことが仰せられてあるのであります。たゞ維新政府のなす所を見れば、餘りに外國の文物制度を採用するに急にして、自國のものは一概に因循なり固陋なりとして排斥し過ぎたのであります。我國古來の文化にも到底他國の追隨し得べからざるほどの長所もあり美點もあることを忘れて之を排斥せんとした傾が多いのであります。私一個の經驗に就て申すことは如何であります。私が小學校の生徒であつた時からこのかたさながら亞米利加の兒童として明治政府から教育せられたものであります。小學校の初めに『イト』『イヌ』『イカリ』等の單語圖を學び、續いて連語圖を學んだのであります。其文句は『神は天地の主宰にして人は萬物の靈なり』『酒と煙草は衛生に害あり』等から學んだのであります。酒と煙草は衛生に害ありは其通りで少しも變なことはありませんが、其神と云ふのは『ゴッド』の直譯であつたと云ふことを後に承はつたのであります。それから修身書を學びましたが、其教科書は亞米利加のウェーランドの著したもの、翻譯書であつて無論基督教主義の徳育でありました。歴史を學べば小學校の初めから外國歴史であつて、日本歴史は教へて貰はなかつた。地理を學べばミツチエル氏世界地理書で日本に關することは一ページか二ページより書いてなかつたと思ひます。中學以上に於ては英語の教科書を多

く用ひましたから一層外國の少年らしく教へられたものです。大學の豫備門即ち後の高等學校に於て明治十六年に始めて一週に一時間新井白石の讀史餘論を教科書として國史を教へられましたが、これが高等學校程度の學校に於て國史を教へられた嚆矢であります。それも獨逸語のお雇教師グロート氏が、豫備門長杉浦重剛さんに向つて各國共此程度の學校にては其國の歴史を授くるものであるので、此學校にはそれが無いのは甚だ不思議であると注意したので豫備門長も成程と思はれ、そこで私共のクラスから國史を置かれたのであります。豫備門長がかの國粹家の杉浦さんであつたからこそ早速グロート氏の忠告を容れられたのであります。若し滔々たる其當時の人々であつたならば、其の忠告も或は容易に受入れられなかつたであらうと思ひます。併し私共は他の一面から觀れば、小學校より歸り途に漢學の先生の所に立寄つて國史略、日本外史、十八史略、大學、論語、等を教へられましたので、政府の手に由つては亞米利加兒童らしく教育せられましたけれども、幸に私塾で謂はゞ補習教育に依つて日本人らしい教育を受けたのであります。私共より稍後れたる或る時代の人は學校に於ても國史及び之に近い學科の教育を受くること少く、私塾に於ても右の如き補習の教育を受けなかつた場合が頗る多いのであります。明治天皇も早くより教育上の此缺陷を御軫念あらせられました。外國の知識は必要である。然しながら自國のことを疎かにしては相成らぬ教育には本と末との區別のあるべきであるとの御趣旨のことを毎々仰せられたのであります。斯様な本末を轉倒した教育を受けた國民が間違つた思想、間違つた感情を懷くやうになるは誠に己むを得ないことであります。今日朝野共に憂ふる所の思想問題の由つて來る所も、世界大戰後の人心の變動を初めとして原因はいろいろありますが、一つは斯様な頗る變つた教育を受けて、思想的傳染に罹り易い身體になつて居つたに由るとも思ひます。』

四 現代改造論に潜む洋意

然るに世界戰は、これまで自他ともに唯一無上なるかの如く考へし歐米文明が、その幾多の缺陷を明らさまに暴露した。かくて西洋人自身が彼等の誇れる文明について反省し初めたのであります。彼等は自己の文明が果して正しき文明であるか、果して人間を社會的には幸福ならしめ、道德的には健全ならしむる文明であるかに就て、深刻なる疑問を抱くに至つた。世界戰後に公けにせられたる英獨佛の學者の著書にして、近代歐羅巴文明の末路を説き、その缺陷を指摘せるものが、寡聞予の如き者の目を通せるだけでも六七種を數へます。就中シュベングラの『西洋の没落』は、非常なる刺戟を思想界に與へた。ペンジャミン・キツドの『力の學』も、また近代歐羅巴文明の非を擧げて、新しき進路を指示せるものであります。かくの如く歐米人自身が近代文明の價値を否定し初めたために、日本の知識階級の間にも漸く洋意を出離せんとする者の現はるゝに至りしは、當然でありながら喜ぶべき傾向とせねばなりません。而も現在に於ては、是くの如きは尙未だ一個の兆候たるに止まり、思想界の大勢は依然として歐米追従を事として居ります。

西洋崇拜が國民の『心の地』となり居る證據は、先づ今日の改造論に現はれて居ります。社會改

造の思想は、世界戦の最も重大なる所産の一つであり、苟くも國家のあるところ、苟くも文化の花
咲くところ、總じて改造運動を見ざるなきに至つた。それは舊きものが舊きままに存続し得ざる時代
に到達したるものなるが故に、改造運動の起るは當然至極と言はねばなりません。日本もまた一切
の方面に於て改造を必要とします。従つて改造論が唱へられ、改造運動が擡頭し來ることに何の不
思議もありません。

唯だ吾等の最も遺憾とするところは、今日の改造論が概ね歐羅巴に行はれたる改造を日本に於て
模倣せんとするものに過ぎざることであります。或者はロシアを模倣しようとして無我夢中である
或者はイタリーを模倣しようとして和製黒シャツ組を造らうとする。その實現せんとする理想、之
を實現する手段、乃至改造を叫ぶ動機は、兩者の間に白雲萬里の懸隔あるとは言へ、異邦に倣はん
とする一點に於ては全く同一であります。或者はまた純乎たる理論に立脚して日本を改造すべしと
主張します。而も其の理論なるものを點檢し來れば、ついに歐羅巴の經濟學、政治學、社會學的理
論の埒外を出でず、まさしく西洋的理論と呼べるべきものであります。

吾等の信ずるところによれば、改造の原理は之を内に求むべくして外に求むべきものでない。そ
れ故に日本の改造とは取りも直さず純乎として純なる日本に復歸することであります。日本國家は
天地と共に無限なるべき莊嚴なる生命である。此の國家に於て改造を必要とするに至るは、内外幾
多の事情によつて、國家的生命のうちに潛む善なるもの、力弱り、惡なるものが横行跋扈し來りて、

本來の面目を蔽ひ去るが故に他なりません。故に日本の改造は、この生命の奥底より善なるものを
復歸し來り、之によつて現に横行する惡を拆伏し、かくして純正なる日本を回復すること以外にあ
る筈がありません。

今日の吾國の改造論者は、日本の惡を認むることに於て正しくして鋭い。まことに現代日本は、
政治界にも、實業界にも、教育界にも、宗教界にも、決して此儘には捨て置かるべくもなき幾多の
惡が横行して居ります。吾等は此惡を責むることに於て、一切の改造論者と共に鼓を鳴らすもので
あります。さり乍ら吾等は、彼等の如く他國の善なるものを借り來りて此惡と戦はうと思はない。
吾等の善は、之を外に求めずして内に求めねばなりません。吾等は日本の生命の裡に美なるものを
把握し、之によつて現前の惡を打倒しなければなりません。それ故に吾等は先づ純乎たる日本精神
に復歸し、吾等の魂の裏に純正日本を確立しなければなりません。かくしてのみ眞個の改造が可能
であります。此の精神によつて、然る後に他國の長を採るは可い。本末主客の顛倒は許さるべくも
ない。

第三 大化革新の回顧

一 危険思想としての儒教

日本の改造を念とする者に向つて、深甚なる教訓を與へるものは大化革新の経緯であります。この革新は當時の吾國の政治組織に欠陥があつたから行はれたことは勿論であります。之を激成したのもは儒教の政治思想であります。儒教は今日でこそ吾々にとりて古い思想であります。初めて吾國に傳へられた時は、甚だ新しい思想であり、且日本にとつて極めて危険な思想でもあつた。今日ではマルクスの共產主義が吾國に於て最も危険な思想となつて居りますが、初傳當時の儒教は恐らく今日の共產主義に劣らぬ危険な思想を含んで居たと云ふことが出来ます。それは何故かと申せば、主権者即ち君主に關する儒教の思想は、日本在來の信仰と天地相容れざる相違があつたからであります。儒教に従へば君主とは有徳者が天命を受けて人民に君臨するものであります。書經に『天、有徳に命す』と謂ひ、或は『天、有罪を討つ』と謂ふやうに、支那では徳があれば君主の位を與へられるけれど、徳を失へば其位を追はれるのであります。徳の高い者が君主になると云ふことは、一見極めて合理的のやうに思はれますが、實際は甚しい不都合を伴ふものであります。何故ならば世の中には徳の優劣有無を定める客觀的の標準がないからであります。

例へば或人が現在の君主に向つて、自分は貴方よりも徳があるから位を讓れと主張すると致します。若し其の君主が、然らばと言つて位を去れば文句はない。茲に所謂『禪讓』が行はれて、新しい君主が天命を受けたこととなります。乍併如何なる場合でも左様なる要求にオイそれと應ずる君主はあるものでない。従つて其の要求を拒絶するとなれば、兩者の徳の優劣を圖るもの、さしは何處にもないから、結局は力を以て君主の位を争奪することになる。若し要求者が敗れた場合は、亂臣賊子として葬り去られますが、反對に君主が敗れた場合は、所謂『放伐』の名の下に位を逐はれるのであります。支那の歴史は、此の禪讓放伐を幾度となく繰返して今日に及んで居ります。此の禪讓放伐の行はれるのが即ち支那の革命であります。革命は即ち『命を革める』ことで、天が不徳の君主を討つて、革めて命を有徳者に下すと云ふ意味であります。然るに此の思想は吾國の思想と全く相容れざるものであります。吾國では神武天皇の直系に非ざる限り、如何なる聖人君子が世に出やうとも、絶対に主権者となることは出来ませぬ。吾國の主権の基礎となるものは、徳でも智慧でも力でもなく、實に血統であります。ところが儒教は前に申したやうな思想を含んで居るのでありますから、明白に日本にとつて危険思想であつたと言はねばなりません。

さて日本人は外來の思想文明に對しては、今も昔も敏感な民族でありますから、儒教が初めて傳へられた時も、直ちに之を歓迎して儒教並に支那文明の攝取に努めたのであります。そうして居る間に、支那では三國以來亂離を極めたので、亂を避けて吾國に歸化する者が多くなりました。彼

等は高い文明の所有者として尊敬され、社会的にも政治的にも好き待遇を與へられました。彼等のうちには秦の始皇帝の子孫と稱せる融通王の如く、百二十餘縣の民を率ゐて歸化したのもあり、雄略天皇時代には其の人口が一萬八千を超えて居た。また後漢の靈帝の子孫と稱せる阿智王も、十七縣の民を率ゐて歸化し、魏の文帝の子孫と稱せる安貴公も多數の供を連れて歸化した。此等の歸化人は工藝技術の教師として、吾國の文化に貢献したのでありますが、朝廷に於て儒教を獎勵し、諸國に記録の官を置くやうになつてから、多く彼等が之に任ぜられました。これは單に諸國の記録を造るのみならず、或は朝廷の出納を記帳し、或は使節として海外に派遣されるなど、當時に於ける最も重要な官職の一つでありました。

かくして雄略天皇の時に至り、皇室の權威は空前に高まり、従つて歳入も増したのであります。其の出納を掌る役に任ぜられたのが蘇我氏であります。蘇我氏が頗る勢力を加へたのは此時からであります。其下に在りて出納を記録したのが、實に歸化支那人の子孫でありましたから、彼等は自然蘇我氏の部下のやうな有様となり、蘇我氏の強大に伴つて彼等の勢力もまた加はつて來たのであります。かゝる間にも支那の混沌は止む時なく、後から／＼亡命者が來ましたが、其等のうちには野心家も居り學者も居た。此の支那の讀書人なるものが、昔も今も油斷のならぬ先生であります。それは儒教が治國平天下の學問でありますから、學問をする者は多く政治的欲望を抱くからである。此等の學者は、故國に於て目の當り王朝の顛覆、主權の更替を見て來た上に、支那人が日

本で蘇我氏と相結んで確乎たる政治的勢力を扶植して居るのを見ては、持前の政權欲をこゝられて蘇我氏を傀儡として自己の非望を遂げやうと企むことは、決して不可能のことでありませぬ。私は日本書紀のうちから此點に就て注意せねばならぬ箇處を指摘します。

試みに舒明天皇紀を讀みますると、六年秋八月には『長星南方に見はる』とあり、七年春正月には『慧星廻りて東に見はる』とあり、八年春正月には『日蝕』とあり、九年春二月には『大星東より西に流る』とあり、其外にも天象に關する記事がある。更に皇極天皇紀には、元年五月に『客星月に入る』とあり、蘇我入鹿の從僕が『白雀子を得たり』とある。一體日本には天象に關する迷信はなかつたのであります。天地萬物は皇室の祖宗の造られたもの天皇は宇宙の主宰者の後裔として天下に君臨するのであるから、星が流れやうが慧星が出やうが、一向念頭にも置かなかつたのであります。ところが斯様な迷信が書紀に現はれたのは、言ふ迄もなく、歸化支那人の感化でありますのみならず更に注意して見ますと、彼等は此の迷信を悪用して、皇室には不利に、蘇我氏には有利に牽強附會せんとした傾向が歴然として居ります。度々日蝕を云々したり、星が月を犯すと言つたりするのは、皇室の不祥を暗示するものであり、蘇我氏の家僕が白い雀をつかまへたと云ふたりするのは、言ふまでもなく祥瑞を數へ立てるのであります。これは決して無意味のことではない。深い計畫あつての事と思はねばなりません。蘇我氏に使喚されて崇峻天皇を弑し奉つたのも東漢直駒と云ふ歸化漢人の子孫であります。彼は實に『吾は蘇我氏あるを知つて天皇あるを知らず』と放

言して憚らなかつたのであります。蘇我氏の悪逆は、神道に背いて佛教に歸化したからだと言はれて居りますが、私は儒教の感化と歸化支那人の煽動とによるものと信じます。されば入鹿を宮中に誅して其屍を父蝦夷に賜はつた時、起つて皇命に抗しやうとしたのは歸化人であります。日本書紀には其間の消息を下の如く傳へて居る。——『鞍作臣(入鹿)の屍を大臣蝦夷に賜ふ。是に於て漢直等眷族を總べ聚めて、甲を擯、兵を持ち、大臣を助けて軍陣を設く。』これは歸化人全部が蘇我氏叛逆の中堅となつて居たことを示すものであります。彼等は蘇我氏に向つて儒教の革命思想を鼓吹し徳あるもの王となるの主義を説き、蘇我氏を擁立して其の政權欲を満足せんとしたものと信じます。

二 大化革新の思想的背景

さて大化革新の主動者は、言ふまでもなく中大兄皇子と中臣鎌足であります。蘇我蝦夷父子が誅せられて、皇位に即き給ふたのが孝徳天皇であります。然るに孝徳天皇の思想信仰に就て、日本書紀は下の如く書いて居ります。——『佛法を尊み神道を輕り玉ふ。人と爲り柔仁、儒を好き玉ふ。貴賤を擧げず、頻りに恩勅を降し玉ふ。』日本書紀には儒教佛教が傳來してから、此の新しい思想信仰に對する天皇の態度を明記して居る。敏達天皇は『佛法を信ぜず、文史を愛す』とあります。文皇は儒教の經典であります。用明天皇は『佛法を信じ、神道を尊ぶ』とある。皇極天皇は『古道を順り考へて政を爲め玉ふ』とある。古道は神道のことであり、これは日本思想史を研究する者に重大なる鍵を與へるものであります。今日は之を詳論する場合でない。唯だ吾々の問題となる

のは、大化革新と云ふ重大時機に皇位に即き給へる孝徳天皇が、佛教を尊び儒教を好み給ひて、神道を輕侮し給ふと云ふことである。

然らば實際の中心人物である中大兄皇子と中臣鎌足は如何なる思想を抱いて居たらうか。御存じの如く此等の兩偉人は、共に南淵請安の弟子であつた。南淵先生は歸化漢人の子孫で、儒者であります。従つて儒教には通じて居たに違ひないが、日本の昔々の生命となつて居る神道に就ては、信仰も體驗もなかつた人に見なければならぬ。この南淵請安が二人の先生でありますから、其の與へたところのものは儒教思想であつたに相違ない。

次に大化新政の實務に當つた國博士、これは内閣書記官長と法制局長官とを兼ねたやうな役目であり、之に任ぜられたのか沙門旻法師と高向玄理であります。兩人とも歸化漢人の子孫で遣唐留學生である。旻は佛徒とは言へ當時第一流の儒學者であり、玄理また漢唐經術の蘊蓄は豊かであつたが、共に吾國の古道に通ぜざりし者と考へねばなりません。

叙上の事實を綜合して見ますれば、吾々は明瞭に大化革新の思想的背景を看得ることが出来ません。大化革新はその初めに於ては實に儒教的精神によつて行はれたものとしなければなりません。それは孝徳天皇紀の記事が證據立てゝ居ります。入鹿が誅されたのは六月十三日、天皇の即位は十四日であります。十九日には『天皇、皇祖母尊、皇太子、大槻の樹の下に、群臣を召集めて盟はしめ玉ふ』とあります。天皇が庭前の大樹の下で、群臣と共に盟ふと云ふやうなことは、純乎たる

支那流のやり方で、吾國では空前でもあり絶後でもあります。此時の誓盟の辭は、恐らく僧旻と高向玄理の手に成れるものと思ひますが、是亦明かに支那思想であります——『天神地祇に告げて曰く、天は覆ひ地は載せ、帝道唯一なり。而るに末代澆薄、君臣序を失へり。皇天、手を我に假し、暴逆を誅し殄てり。今共に心血を瀝む。今より以後、君は二の政なく、臣は朝に貳くことなし。若し此盟に貳かば、天災し地妖し、鬼誅し人伐たむ。岐きこと日月の如し』。文中に『皇天、手を我に假し』とあるは、商書の伊訓に『皇天降災、假手於我有命』とあるのから採つたもので、天神地祇も吾國の『あまつかみ』『くにつかみ』ではなく、支那的のものであります。わけても『帝道唯一』と云ふのが、言葉からして純支那的理想であります。日本の天皇は『天神にして皇帝』であります。この天皇から『あまつかみ』たる神格を奪ひ去つたのが支那風の君主思想であります。それで茲にも帝道など、申して居ります。

次で七月十二日に至り、天皇は左大臣阿倍倉梯麻呂、右大臣蘇我石川麻呂に向つて、次の如く仰せられて居る——『當に上古の聖王の跡に遵ひて天下を治むし。復た當に信をもて天下を治むべし』。これまた非常な詔と申さねばならぬ。何故ならば茲に上古の聖王と云ふのは、神武天皇のことでもなければ應神天皇のことでもない。吾國の皇祖皇宗のことなしに、支那の聖王のこと、堯舜禹湯文武のことであります。即ち支那の先王の道を遵奉して政治を行はうと云ふのである。それから『信をもて天下を治むべし』と云ふのは一層驚くべき詔である。支那では有徳作王主義でありま

すから、君主は有徳の故を以て命を天に受けたことを民に信じさせなければなりません。故に民に信を示すと云ふことは最も肝要なこととされて居る。さり乍ら吾國では、神武天皇の御子孫として皇位に即くと云ふことが無上絶對の信であつて、孝徳天皇が神武の裔として天津日嗣の位を繼がれた其事以外に、また其事以上に、信を民に示す必要も方便もないのであります。

茲で最も重大なのは左右兩大臣の態度であります。兩大臣は果して如何なる態度を執つたか。書紀には明文がありませんが、前後の記事から推して明かに反對の意思を示し、天皇の御反省を求めたものと思はれます。それは翌三十日に、天皇は更めて兩大臣に下の如き詔を下されたからであります——『あまねく大夫と百の伴道等に、悦びを以て民を使ふの路を問ふ可し』これは天皇が兩大臣の反對に合ひ、然らば百官相談の上で新政の方針を定めよと、折れて出られたのであります。

かくて此日宮中に於て重大なる會議が開かることになつた。會議の様子は日本書紀に載つて居らないけれど、瞑目して追想すれば其時の光景があり／＼と浮んで來る。天皇は佛法を尊び儒教を好んで神道を輕んじて居られる。皇太子と中臣鎌足は南淵先生を師として儒教を學んだ人々である。政務の實際に當る國博士は兩人とも歸化漢人の子孫である。滿朝皆な是れ儒教主義者であります。其間に在りて日本の古道を主張して斷乎として譲らなかつたのが左右兩大臣だけであり、主として論難力説に努めたのが右大臣蘇我石川麻呂である。恐らく非常な激論の後に、幸にも石川麻呂の精神が勝利を得て、翌十四日に彼は會議の結果を下の如く奏上して居る——『先づ以て神祇を祭ひ鎮

めて、然る後、應に政事を議るべし』。

神祇を祭ひ鎮めると云ふことは、大嘗會を行ふことでもあります。大嘗會は定められたる田から上がる新穀で、神酒を造り御飯を炊いて神前に捧げ、天皇親らも之を召上がる歴代の恒典で、即位式と併せて之を御大禮と呼ぶほどの重大なる儀式であるのに、大化革新の當初は、即位後一ヶ月を経ても其の用意さへもせぬと云ふ有様であつたのであります。この石川麻呂の奏上によつて初めて人を遣はして悠基主基を定め、其の準備に取りかゝられたのであります。これは驚くべきことと申さねばなりません。大化革新が支那思想によつて行はれたことは、此の一事が最も有力に立證して居ります。それにつけても吾々は蘇我石川麻呂に對して深甚なる感謝を捧げざるを得ない。彼は和氣清麿と並び稱すべき日本の恩人であります。若し彼れの忠誠なかりせば、大化革新は吾國を如何なる危険に導いたかも知れなかつたのであります。彼れの在るありて、日本を支那たらしめることかから救つたのであります。

想ふに中大兄皇子と中臣鎌足とは、十三日の宮中會議に於て、石川麻呂の主張を聞き、豁然として悟るところあつたに相違ない。皇子は神武の後裔で不世出の英雄であり、鎌足の家は代々神祇に奉仕せる家柄である。その學ぶところが儒教であり、且當面の改革に心思を勞して居たので、吾國本來の精神を一時忘れて居たにもせよ、石川麻呂の論議を聽くに及んで、其魂の底に昔乍らの日本の古道が豁然として蘇り來つたことと思はれる。さればこそ大化革新は、此時を中心にして前後全

く其の精神を異にして居ます。即ち以前は支那的であり、以後は徹底して日本的となつた。私は此の顯著なる相違を日本書紀の記述から指摘します。

三 復興せられたる日本精神

大化革新の根本思想の一變は、先づ八月一日に東國の國司を召集して彼等に賜はつた詔に歴然と現はれて居る。それは『天の神の所奉寄たまひしまに／＼いま始めて萬國を修めんとす』とあります。前には堯舜禹湯文武の跡に遵つて天下を治めやうとされたのが、今や俄然として支那思想の心酔から醒め、皇祖皇宗の大御心を奉じて政治を行ふと仰せられたのであります。これが正しき皇國の政道であります。天皇は『神のまに／＼』國民に君臨し、國民は『神のまに／＼』天皇に奉仕する以外に、日本にとりて正しき政治はあり得ませぬ。

次で天皇の呼稱も、帝道と謂ひ皇帝とも謂ふが如き支那風を脱却して、赫々たる日本の稱號を用ゐられるやうになつた。即ち大化二年二月十五日に百官有司に下された詔の冒題には『明神御宇』したしらすやまとのやまといねこのすめらぎ日本倭根子天皇』と仰せられて居ります。現神と云ふのは、天照皇太神の神格をそつくり其儘に具足した御方であるからである。御宇と云ふのは、宇宙を統御するの意味で、これは宇宙の主宰者たる天照皇太神の神威又は神權を繼承されて居るからである。天皇は『すめろぎ』又は『すめらぎ』と讀み、統べる君即ち統一者の意味であります。天皇が是く仰せられたことは、取りも直さず支那的君主の理想から日本の昔乍らの雄渾なる天皇的自覺に立歸られたことを示すものでありま

す。

かくして中大兄皇子の天皇に對し奉る態度も、以前の支那的のものでなく純乎として純なる日本のものとなつたことは、大化二年三月二十日、天皇の下間に對する奉答のうちに最も明かに現はれて居る——『天皇我皇の萬民を牧はすべき運に屬りて、天も民も合應へて、その政これ新なり。是故に之を慶び之を尊びて、頂き戴きて伏まりて奏す。明かに明神として八嶋國しらす天皇、臣に問ひ玉はく云々』。

この日本の古道に復歸せる大化革新の精神を、更に堅固に確立したのが大化三年四月の名高い詔勅であります——『神ながらも、我子治らせと故寄さし玉ひき。是をもて天地の初とともに、君と臨らす國なり。始治國皇祖の時より、天下大に固まりて、都て彼此なき者なり』。これは天孫降臨に際し天照大神が下し玉へる嚴勅を更めて宣言したもので、當時吾國を誤らんとせる儒教の有徳作主義を根柢より否定し、森嚴極まりなき日本の國體を昌言せるものであります。

かやうにして大化革新は、當初は儒教的理想が主になつて行はれたにしても、幸に日本の古道に復歸して正しい根柢の上に立つた故に、あれほど急激にあれば根本的な改造を斷行したに拘らず國家は之が爲に何等の禍を蒙むることなく、却つて奈良朝時代の如き國運隆盛の世を招徠したのであります。これは立つところ正しければ、如何に外國の制度組織を採用しても、之を國家に役立たしめ得ることを示すものであります。それ故に如何なる時代に於ても最も肝心なことは根本の確立

であります。根本が確立しさえすれば一切の場合に善處し、一切の事情を活用することが出來ますこれは大化革新の吾々に示す偉大なる教訓であります。

さるにても吾々の感激措く能はざるは蘇我石川麻呂の精神であります。私は序を以て此の偉人に就て少しく述べて置き度い。石川麻呂は入鹿とは從兄弟の間柄であつたが、鎌足の信賴を受けて大事を打明けられ、其女を中大兄皇子の妃に納れて深く結托し、入鹿を誅するの日は三韓の表文を讀む大役を引受けたのであります。然るに事成りて右大臣に拜し、挺然敢言して大化革新の局面を一せしめて以來、一世の尊敬を受けたと同時に、憚られ且嫉まれたものと見え、大化五年皇太子のため殺されて仕舞つた。その経緯は日本書紀に詳しく述べられて居ります——

『三月の乙巳の朔、辛酉、阿倍の大臣薨す。天皇朱雀門に幸してかなしみ玉ふ。皇祖母尊、皇太子、及び諸公卿、悉く隨て哀み奉る。戊辰、蘇我臣日向、倉山田大臣(石川麻呂)を皇太子に諷ちて曰く、僕の異母兄の麻呂、皇太子の海濱に遊び玉ふを伺ひ、將に之を害はんとす、反きまつらんこと共れ遠からじと。皇太子之を信じ玉ふ。天皇、大伴狛連、三國麻呂公、穗積嚙臣を蘇我倉山田麻呂大臣の所に使はして、反むことの虚實を問はしむ。大臣答へて曰く、問はるゝことの報は僕まのあたり當に天皇之所に陳さむと。天皇また三國麻呂公、穗積嚙臣を遣はして其の反狀を密かにせしむ。麻呂大臣また前の如く答へ申す。天皇乃ち軍を興として大臣の宅を圍まんとす。大臣乃ち二の子法師と赤伯とを將ひて、茅渟の道より逃げて倭の國の境に向く。大臣の長子興志、是より先倭に

在り、其寺を營み造る。今忽ち父の逃げ來れることを聞き、今來の大槻に迎へて、近くさきだちて寺に入る。顧みて大臣に謂ひて曰く、興志請ふ自ら直ちに進みて、來る軍を逆へ拒がむと。大臣許さず。この夜興志、こゝろに宮を焼かんと欲し、猶ほ士卒を聚む。己巳、大臣長子興志に謂ひて曰く、汝身を惜むか。興志答へて曰く、愛まず。大臣仍て山田寺の衆僧及び長子興志と數十人とかたらひて曰く、大は人臣たる者安んぞ君に逆らうことを構え、何ぞ孝を父に失はんや、凡そ此の伽藍は元より自身のために造れるに非ず、天皇の御爲に誓つて作れるなり、今我れ身刺(日向のこと)に誣ちられて横に誅されんことを恐るゝも、聊に黄泉に尙ほ忠を懐いて退らんと望む、寺に來る所以は、終りの時を安からしめんとなり。言ひ畢りて佛服の戸を開き、誓をたてて曰く、願はくは我れ生々世々君王を怨まずと、誓ひ訖りて自ら經きて死す。妻子の死に殉ふ者八。……是月、使者を遣はして山田大臣の資財を收めしむ。資財の中、好書の上には皇太子の書と題し、重寶の上には皇太子の物と題せり。使者還りて收むる所の狀を申す。皇太子始めて大臣の心猶ほ貞淨なるを知り、追て悔ひ耻ぢることをなし、哀歎休み難し。

國家の重臣阿倍左大臣が薨じて、物情騒然たりし時に、恐らく彼れの威望を嫉んだ異母弟が、彼を中大兄皇子に讒言したのである。而して皇子が容易に此の讒言を信じたのは、平生から彼を畏れ憚かつて居たからであらう。彼は憤激せる興志を諭し、人臣の大義を一族從者に教へ、生々世々の忠節を佛前に誓ひ、讒言を信じて自分を殺す皇太子に良書と重寶とを遺贈して、心靜かに自盡した

のであります。その沈着にして而も壯烈なる態度は、末の代の末の代までも景仰を受くべきものであります。かゝる偉人ありてこそ大化革新の非常時に際し、吾が國體が確保されたのであります。

四 非日本の諸相

今日の日本は、共產主義者が國體の顛覆を企てると云ふ非常な時機に遭遇して居ります。昔の蘇我氏は歸化支那人と相結び、儒教の政治的理想に迷はされて非望を抱きましたが、今の共產主義者は勞農ロシアと相結び、マルクス思想を奉じて陰謀を企てるのであります。乍併蘇我氏の非望を抱くやうになつたのは、當時の日本に非常なる欠陥があつたからであります。聖德太子の如きは最も明瞭に此の欠陥を看取し、國家を是くの如き危険より救ふためには、蘇我氏の如き者をして乗ずる隙の無からしめるほど、思ひ切つた改革を斷行しなければならぬと考へ、すでに其の準備に着手して居られたやうであります。中大兄皇子は其の精神を繼承して改革を實行したのであります。同様に今日共產主義者が陰謀を企てるのも、今日の日本に重大なる欠陥があるからであります。故に蘇我氏の跡を絶つために大化革新が必要であつたやうに、共產主義者をして爲すところ無からしめる爲めには、必ず昭和維新を必要とします。心ある者は此の一事を片時も忘れてなりません。

さて今日の吾國の欠陥は、いろ／＼な原因が複雑に絡み合つて生じたのであります。其の重大なる原因の一つは西洋に對する過度の崇拜であると思ひます。初めに申上げたやうに、日本は明治維新以來一心に西洋の制度文物を取入れた。これは無論一面に於て非常に日本の爲になつた。日本

が世界の強國となり得たのも其のためである。乍併外來文化が其國のために役立つのは、國民精神が緊張し、國民的自覺が強大である間に限ります。若し精神の緊張がゆるみ自覺が薄張になれば、必ず本末主客が顛倒されて、却つて災厄を招くことゝなるのであります。吾國も日露戦争までは國民が非常に堅固なる覺悟を抱いて居たので、外來の思文想明によりて益せらるゝこと書く、害を受けること少なかつたのであります。一度びロシアを破つて世界第一等國の仲間入りをしてからは俄に心に油斷が生じ、それに加へて是迄の國民的理想——是非ともロシアに勝つて一等國民にならねばならぬと云ふ理想が一應は成就されたけれど、之に代るべき具體的理想を與へられなかつたので、個人でも國家でも志を失つた場合にいつも左様であるやうに、次第に精神がだらしなくなつて行つたのであります。

かうなつて來ると、今迄は役に立つて居た西洋の思想や文物が、いろいろな害を及ぼすやうになる。もと／＼西洋の制度文物は、明治の初年に考へたやうな立派なものではなく、それ自身に幾多の欠點を具へて居る上に、西洋には良くても日本には適せぬものも多い。それが年と共に明かになつて來たのであります。吾々は洋意を去つて、純乎たる日本の立場から、總ての物事を判斷しなければならぬ時に到達して居るのであります。而して純乎たる日本の立場に復るためには、吾々は日本精神の本質を正しく把握しなければなりません。そのために最も肝要なことは古典の研究であります。心を濃かにして古事記や日本書紀、乃至は萬葉集を読みますれば、其處に日本精神の躍如たる

姿を認めることが出來ます。吾々は斯くして把握した昔乍らの精神を、吾々の魂に復活させねばなりません。これを能くした後でなければ、日本の改造は無駄でもあり危険でもあります。

第四 何故に國史を學ぶか

一 歴史の意義

ヘカイトス、ヘロドツス、ツキヂデスの三人は、西洋史の父祖と呼ばれる古代希臘の三大歴史家であります。この三人は、約五十年づゝ隔て、世に出たのでありますが、それぞれ歴史について下のやうに言つたと傳へられて居ります。先づ西紀前五〇〇年に世に出でたヘカイトスは、歴史を以て過去の知識を現代に傳へるものだとしました。次で西紀前四五〇年代のヘロドツスは、歴史とは過去によつて現代を説明するものだと言ひ、最後に西紀前四〇〇年代のツキヂデスは、歴史は過去現在によつて未來を察知すべきものとしたのであります。即ちヘカイトスは歴史の重點を過去に置き、ヘロドツスは現在に置き、ツキヂデスは將來に置いたのであります。これは孰れも一理あることとありますが、此等の三者を綜合した方が、歴史の全面目を一層明かにすることが出来ると思ひます。

言ふ迄もなく歴史は人類發展の徑路を研究するものでありますが、その徑路は一貫不斷のものであります。吾等は便宜のために過去・現在・未來と區劃して居りますが、現在は過去から生れて而も刻々過去となり、未來は現在に孕まれて而も刻々現在となり、行水の流れにくぎりを付け難いと同

じく、實は分ち難き生命の流行があるだけであります。それ故に吾等はたゞ永遠の現在に生きて居るといふことが出来ず。而してこの『現在』は、其衷に無限の過去と無窮の未來とを含む現在なるが故に、歴史もまた過去・現在・未來に關するもの、一層詳しく申せば過去によつて現在を説明し、現在によつて未來を推察するものとせねばなりません。

この意味に於て直ちに想ひ起されるのは、水戸の彰考館であります。彰考館は徳川光圀によつて創立せられし水戸藩の修史局で、大日本史が此處で編纂せられしことは天下周知のこととあります。この修史局に彰考館と名づけたのは、晋の杜預の『春秋左傳集解』序に『彰往考來』とあるに據つたものと思はれます。彰往考來は、易の繫辭傳に『彰往而察來』と謂ひ、論語に『溫故而知新』と謂ふのと全く同一思想で、過去を明かにして將來を推察するといふ意味であります。従つて修史局の名稱として、まことに適切無比といはねばなりません。

吾等は永遠より永遠に亘る『日本の生命』の一断面であります。意識するとせぬとに拘らず、吾等は國民總體としても將又個々の日本人としても、實に日本歴史の全體を宿して世に立てるものであります。今日の日本を知らずして明日の日本を察し難き如く、過去の日本を知らずしては斷じて今日の日本を知るべくもない。吾が現に生きつゝある國家、並に吾等自身を正しく把握するためには必ず國史を學ばなければなりません。司馬溫公がその畢生の心血を注げる史書に『資治通鑑』と名づけたる如く、歴史はまさしく吾等の如實の姿を知るべき鏡であります。歴史を學ぶことは眞個の

自己を知る所以であります。眞個の自己を知ることなくしては、正しい行動も固より不可能であります。それ故に東洋に於ては、古來經史の二學を士人必修のものとして居たのであります。經學は今日の言葉で申せば哲學であり、史學は文字通り歴史であります。昔は學問と申せば修身治人の道を究めることであり、而して之を究めるために經史を學んだのであります。修身治人と申すのは道徳並に政治のことで、修身治人の道とは取りも直さず私人並に公人として正しく世に處する道といふことであります。

二 現代の國史無視

歴史を學ぶといふことは是くの如く重要事なるに拘らず、現代の最も著しき傾向の一つは、實に歴史を無視することであり、少くも今日の青年の多數は、自國の歴史に對して殆ど何等の興味を有せず、從つて心を濃かにして國史を學ぶことをしない。而して是くの如き非歴史的傾向が、改造運動に没頭する青年の間に最も顯著なることは、一層驚くべき事實であります。なるほど改造は一面から申せば破壊であります。あらゆる舊いものゝ破壊であります。この改造の機運は、世界戰によつて激成された風潮で、東と言はず、西と言はず、社會國家の存するところ、皆な其波に洗はれざるは無い。日本ひとり此の風潮の外に立ち能はざるは言ふまでもありません。あらゆる舊いもの風俗習慣も、制度文物も、乃至は思想信仰も、最早舊いままで存在することを許されず、改造即ち破壊の道程にあるものと思はねばなりません。さり乍ら眞個の改造は假令破壊に始まつても、決

して破壊で終つてはならない。その破壊は必ずや建設のための破壊でなければなりません。

然らば其の建設の原理は、これを何處に求むべきか。先蹤を追ふのも確かに建設の一方法であります。或は最も容易に思はれる方法でもあります。吾等は國家社會を改造又は革新せる先蹤としてロシアを有しドイツを有し、またイタリーを有して居ります。而して吾國の青年の中には、徹頭徹尾ロシアに倣つて吾國を改造せんと熱中して居るものがある。或はムツソリニがイタリーを改革せるに倣はんとするものもある。純乎たる理論によつて、建設を試みるのもまた一方法であります。而も今日のところ吾國に於て唱へらるゝ純理は、ついに西歐哲學及び科學の理論を出でない。かゝる理論は之を西洋に施してさへ實行を不可能とするもの多く、之を日本に實現することは正に一個の空想に等しい。兩者とも吾等の與し得ざるところであります。

如何なる世、如何なる國といはず、改造又は革新の必要は、國民的生命の沈滯・頹廢から生れます。生命の沈滯頹廢は、善なるものゝ力弱り、惡なるものゝ横行跋扈するによります。故に之を改造するためには、國民的生命の衷に潜む偉大なるもの、高貴なるもの、堅實なるものを認識し、之を復興せしむることによつて、現に横行しつゝある惡を打倒しなければなりません。簡單に申せば改造又は革新とは、自國の善を以て自國の惡を討つことであらねばならぬ。そは他國の善なるが如く見ゆるものを藉り來りて、自國の惡に代へることであつてはならない。それは精々成功しても木に竹をつぐだけのもので、決して樹木そのものゝ生命を更新するのではなく、別個の竹として仕舞ふ

ものであります。それ故に建設の原理は、決して之を他國に求むべきものでなく、實に吾衷に求むべきものであります。

然るに吾衷に求むべき建設の原理は、唯だ自國の歴史を學ぶことによつてのみ把握することが出来ます。今日の如き改造の必要に當面しつゝある時代に於て、吾等はいよ／＼歴史研究の重要を痛感する。たゞ明治以來史學者の研究が専ら考證詮索の方面に注がれ、之が爲に歴史は現代と縁遠きものとなつて居ります。これは學問分化の自然の結果であり、考證を精密にするといふことは極めて必要のことではあります。單にそれだけに止まることは史學の本旨でない。歴史は決して單なる記録の詮索ではありません。記録は畢竟歴史の材料たるに過ぎない。例へば如何に多くの植物や動物を集めても、それだけで植物學や動物學が成立するものでなく、與へられたる材料を一個の原理によつて取捨選擇したる後に、初めて特殊の科學が成立するやうに、歴史もまた現實の原理によつて過去の事實を取捨選擇せる知識體系であります。明治以來吾國の史學界の傾向は、主として歴史のための材料を發見し蒐集することになりましたから、史學者と言へば古文書をいぢくる人のやうに世間は思つて居るのであります。吾等は前に申上げたやうな時代に當面して、殊更切實に眞個の國史學者、材料提供者に止まらざる眞個の國史學者、大處高處に着眼して全體を正しく摺む國史學者の出現を翹望して止みませぬ。而して此の翹望は、文學博士平泉澄氏の努力によつて必ず満足せしめらるべきことを私は信じて居ります。私は先年平泉博士が發表せられたる『國史學の骨髓』と

題する一篇を読んで至心に感激し、爾來今日に至るまで國史研究に於ける吾師と仰いで居ります。平泉博士の如き、史學者の出現によつて、國史は初めて生命を與へられ、新日本建設の生命の泉となり得るのであります。

三 日本書紀

さて吾國に於ける最初の且根本の歴史は日本書紀であります。何故に朝廷が此の歴史を編修せられたかを知ることが、國家と歴史との關係、從つて歴史の重大性を明かにする上に極めて肝要なことであります。第一に國史を編修するといふことは、國民的自覺が強烈になつたことを示して居ります。強烈なる自覺は深刻なる反省を伴ひます。日本書紀はまさしく國民的自覺並に反省の所産である。然らば其の自覺は如何にして生じたか。それは大和民族の發展が一定の程度に達したためであることは言ふまでもないけれど、此の内面的事情の外に、直接にして有力なる外面的刺激があつたからであります。その刺激は取りも直さず支那との接觸であります。我の確立は非我との對立に待つ。それは個人の場合でも民族の場合でも同じことであります。日本は支那との交通によつて明瞭なる國民的自覺を生じたのであります。

吾國は支那と接觸して、推古天皇以來盛んに隋唐文明を取入れ、大化革新の如き、之を表面にいつてのみ見れば、恰も日本を以て小支那たらしめたる如き觀があります。それにも拘らず日本は毫も昔乍らの大和魂を失はざりしことは、當時吾國の支那に對する態度を見れば明白であります。聖

徳太子が隋の煬帝に對して『日出處天子、書を日沒處の天子に致す、恙無きや』との國書を致せる如き、また天智天皇が百濟を援けて唐帝國と戦へる如き、それが當時に於て最も熱心なる隋唐文明の採用者であつただけ、それだけ吾等をして感激に堪えざらしめるものであります。さればこそ桓武天皇の時に、姓氏録を撰ばせられるに際しても、支那歸化人を蕃別の部に編入して居るのであります。文明の點に於ては模範とせる支那ではあるけれど、之を扱ふに外蕃を以てせるところに、雄大森嚴なる精神が躍動して居ります。これを今日吾國の共產主義者が、ロシアを『吾が祖國』と呼んで恥ぢるところなきに比ぶれば、正に天地雲泥の差と申さねばなりません。

かやうに支那に接觸し、その文明を採用すると共に、日本的自覺が強大となつたので、日本建國の由來及び精神、之に伴ふ國體の尊嚴を内外に示すために、朝廷に於て國史の編修を企てられたのであります。而して最初に是くの如き修史事業を創められたのが聖徳太子で、天皇紀、國記、臣造伴造國造百八十部、並に公民の本記を撰修されたのであります。國記を除く其他の記録は、不幸にして蘇我氏と共に亡び、國記もまた後には散佚して其の内容を知るよしもなくなりました。其後天武天皇の時に至り、更めて國史編纂の業を創められ、それが元正天皇の時に完成せられて、日本書紀として今日に傳はつて居るのであります。而して其間に元明天皇の時、太安萬侶が勅を奉じて、稗田阿禮の傳誦を撰録した古事記も出來ました。かくの如く修史事業が盛んであつたのは、全く日本的自覺が極めて旺盛であつたからであります。

さて日本書紀が特に國號を冠したのは、獨り國民に對して建國の由來精神を知らしむるのみならず、外國に對してまた國體の尊嚴を宣揚するために編修されたものだからであります。それ以外の歴史は、單に天皇紀、國記、古事記といふ風に『日本』と特別に銘に打つて居ないのであります。外國と申しても主として支那であります。言ふ迄もなく當時の支那は唐朝の盛時であり、吾國が盛んに其の文物制度を取入れた先進國であります。その先進國に向つて、吾が日本は是くの如き莊嚴なる國柄であるぞと示すために、日本書紀を編修したといふことは、日本精神の不羈獨立を立證するものとして、吾等のの最も感激に堪えざるところであります。かやうに支那にも示す目的でありますから、文章も堂々たる漢文で、漢籍の章句を藉り來つて大いに記事を潤飾して居ります。そのために本居翁を初めとし多くの國學者は、古事記を尊重して日本書紀を疎んずる傾向があります。けれど、これは吾等の贊同し兼ねるところであります。なるほど文章は漢文であり、形容修辭に苦心はして居りますが、そのために些かも日本の眞面目が蔽はれて居りませぬ。これは書紀編修者が明確強烈なる日本的意識を以て事に従つたからであります。特に神代卷に於ては『一書曰』として總ての異説を列記し、些かも臆斷を下さず、また事實を蔽はんとせざるところに、公平無私にして天空海潤なる日本精神が、わけても躍如として現れて居ります。古事記と共に最も尊重すべき古典と申さねばなりません。

さて日本書紀三十卷が完成されたのは、元正天皇の養老四年のことではありますが、朝廷に於ては

進奏の翌年即ち養老五年から、直ちに日本書紀の講義を宮中に開かせられ、親王・太政大臣・左右大臣より参議に至るまで、皆な講義を陪聽せしめられ、講義終れば饗宴を催して陪聽者一同に饗宴を賜はり、饗宴中に日本書紀に現れたる人物を題として和歌を詠ませるのが例となりました。これは國家の政務に當る者をして、建國の由來を忘れざらしめんとする大御心に出でたものと拜察せられます。かく一方に於て日本書紀の講義をなさると同時に、他方に於ては日本書紀の後を承けて、つぎつぎに國史の編修を行はせられ、所謂六國史が出来たのであります。

四 國史と國家

かやうな次第であるから、國史の尊重と國家の盛衰とが、常に相伴ふことに何の不思議もありません。何となれば、國史を尊重するといふことは、取りも直さず國民的自覺の強烈を意味するからであります。現に藤原氏專權の世となつてからは、日本書紀の講義も、國史の編修も、兩ながら中絶してしまひました。それは日本建國の精神を明かにし、國體の本義を反省することは、藤原氏にとりて不利だからであります。而も建國の精神を没却して國家が榮える道理はない。平安朝の末期藤原氏專權時代の日本は、殆ど無政府ともいふべき亂脈に陥つたのであります。

後三條天皇は政權を藤原氏の手から再び朝廷に收められましたが、白河天皇が更に其の御遺志を繼がれ、讓位の後に所謂院政を始められました。院政は最も目立たぬ方法で、政權を皇室に回復するための制度で、吾等は之によつて偉大なる政治的手腕を白河天皇に於て見奉るものであります。

かゝる雄志を抱いて居られましたから、絶えて久しかりし國史編修のことも思立たれ藤原信西をして本朝世紀を撰述せしめられたのであります。其後保元平治の亂を経て、政權武門に移るに及んでは、また朝廷に於て修史の御企てなく、日本書紀の講義もなかつたのであります。

後醍醐天皇の建武中興は、假令回天の偉業中道にして挫折したとは言へ、まがふべくもなき日本精神の勃興なるが故に、この精神の最も見事なる結晶として、北畠親房の神皇正統記が生れたのであります。神皇正統記は、建國の精神を明確端的に宣揚せる點に於て、眞に空前の史書であり、平泉博士がいみじくも道破せる如く、前に遠く建國創業をのぞみ、後に遙に明治維新を呼ぶところの國史の中軸であります。平安朝の末葉から鎌倉時代の初めにかけて國史を等閑に附したことは、當然國體觀念の昏迷を招き、今日から考へて到底許し難い思想が行はれて居ました。例へば慈鎮和尚の愚管抄に現れた思想であります。慈鎮和尚は法性寺關白藤原忠道の子でありますが、其著の中には天皇のことを皆な『國王』と書き、甚しきは禮記の百王説を其儘に取入れて『皇統百代限り』といふやうな妄誕至極の言をなし、『神の御代は知らず、人代となりて神武天皇以後百代とぞ聞ゆる。既に残り少なく八十四代にもなりける』とさへ述べて居ります。八十四代と申すのは順德天皇のこととて、もう十六代で日本の皇統は亡ぶといふ驚くべき思想であります。また延暦寺には番神なるものがあつて、法華經の守護をなさることになつて居た。初めは十二支に當るそれぞれの日に一柱の神が交替に守護するといふので十二番神、後には月の三十日に對して三十番神を置くやうになりま

したが、子の日の番神は長多くも天照大神であります。天照大神を法華經の番人にして怪しまぬ時代であつたのであります。かやうな時代の後を承けて、わが北畠親房が『大日本は神國なり』と高唱し、神胤永く此世に君臨して天壤と共に無窮なるべきことを明確に力説したのは、正に一句鐵崑崙、虚空をして稀有と叫ばしむるものであります。此書一たび出で、大義名分の存するところ、煥乎として千歳に明かになつたのであります。

室町時代は初めから國家的統一がなかつたのでありますが、應仁亂以後は一層亂雜を極めました。皇室の式微も此頃を以て空前絶後とします。かゝる時に當りて後土御門天皇が日本書紀の講義を再興し、吉田兼俱を召して之を進講せしめ、古への如く親王・大臣・公卿を陪聽せしめられたことは、取りも直さず日本精神再興の前兆であります。爾來日本書紀の講義が次第に行はれ初め、親王公卿を初めとし地方の豪族も學者を招聘して之を聽聞するやうになりました。次で後柏原天皇及び後奈良天皇が、共に銳意朝廷の再興に御心を砕かれた。後柏原と申上げるのは、柏原天皇即ち桓武天皇に對するものであり、後奈良と申上げるのは奈良天皇即ち平城天皇に對し奉るものであります。まことに此の兩天皇は桓武平城の盛世を復興するために、非常の御苦心であつたのであります。後奈良天皇の如き、日常の供御にさへ差支へられ臣民に宸筆を賜はり、其の禮物を以て御生活を續けられたほどの御窮困であらせられたに拘らず、その御日記の毎月朔日の條に『萬國治平・百蠻歸服・朝廷再興』又は『海内靜謐・朝廷再興』と書かせられたるを見て知り得る如く、莊嚴偉烈の御精神

を以て、皇室の復興を圖られたのであります。之について吾等の最も感激に堪えざるは、當時周防の大内義隆が日華門御造營料として金一萬匹を奉獻し、その恩賞として大宰大貳に任ぜられんことを奏請した時、天皇は非常の逆鱗で其請を斥けられたことであります。義隆は曾て御即位に際しても金二十萬匹を献上し、其後も度々供御を助け奉つたことがあり、それらの功勞に對しても今度の奏請は勅許になりそうに思はれるのに、斷乎として之を斥けられたのは、千古その凜然の御精神を仰がしむるものであります。この御精神が天下の人心をして皇室に嚮はしむるの氣風を開かれたのは當然のこと、戰國の諸雄多く心を皇室に寄するに至り、ついに正親町天皇の御代に織田信長出で、皇室を再興し、天皇を奉じて天下に號令し、豊臣秀吉其後を承けていよいよ皇室を尊崇し、國民をして再び天日を仰がしめたのであります。

徳川氏は皇室を宗教的に尊崇しましたが、全く政治的權力を取り去りました。これは言ふまでもなく日本の國體から申せば變則の政治であります。然るに徳川氏の史學獎勵は大いに國史の研究を促し、水戸藩の編修にかゝる大日本史を初め、保建大記・中興鑑言の如き、乃至は日本外史日本政記の如き、國民をして國體の本義を反省せしむる幾多の著書が世に現れ、ついに明治維新の機運を促進するに至つたのであります。

以上の事實は、史學の消長と國家の盛衰とが常に相伴ふことを示して居ります。これは歴史が國家を隆盛ならしめるといふよりは、史學によつて覺醒せられ喚起せられた日本精神が國を興こすの

であります。それ故に吾等は、殊に現今の如き時代に於て、國史の研究の重要なことを力説したいのであります。たゞ正しい國史の研究のみが、吾等をして日本歴史の尊貴、日本民族の偉大、日本國體の莊嚴を體得せしめるのであります。

第五 國史による日本精神の把握

一 象徴としての正倉院

佛典に下のやうな比喩が説かれて居ります。昔舍衛國の山中に百匹の猿が棲んで居たが、そのうち九十九匹は鼻缺猿で、たゞ一匹の猿だけに鼻があつた。すると九十九匹の鼻缺猿が鼻のある猿を片輪者と罵り、罵られた猿は折角の鼻を悲觀したといふのであります。これは甚だ面白い比喩で、吾等は此の比喩が適切に當て筈まる事實を常に目撃して居ります。支那にも『千人の諸々は、一士の誇々に如かず』といふ言葉がある通り、眞理は決して多數決できまるものでないに拘らず、とかく人間は多數を好み、また多數に動かされる弱點を有つて居ります。『何ぞ人言を畏れん、但だ我法を用ふ』といふやうな自信を抱く人は稀有であります。此事は今日の日本人が國史並に國體に關する思想の上にも明白に現はれて居る。今日の吾が同胞は、わが國民並に國體が萬國無比なることを高唱する確信と勇氣とを失ひ、日本も一つの國家である以上、格別他國と異なる筈はないと考へて居ります。

かくの如き傾向は、人間に本具なる多數を好み多數に動かされる弱點と、世界に漲るデモクラシーの影響とによつて助長されたものであります。デモクラシーの思想は、總てのものを同一水平面

に並立せしめんとします。それは貧富貴賤、美醜高低を平均し去り、或る特殊の神聖優越なるもの、存在を承認しない。それは天才を氣狂扱ひにし、英聖を凡人化すると共に、小人凡夫をも一定の平準點まで高めやうと努める。それは強國の雄大なる理想を否定すると同時に、弱國の地位を高めて之を世界的水平線に達せしめんとする。この水平運動は固より重大なる世界的意義を有し、人類の向上發展に資するところ多きは言ふ迄もありません。従つて今後も續行せらるべく、またせしめらるべきものであります。

さり乍ら吾等は、斷じて此の思想運動に伴ふ弊害に捲込まれてはなりません。野蠻を文明ならしめ、醜惡を善美ならしめ、低きを高からしむることは飽迄も之がために努力しなければならぬ。而も神聖を冒瀆し、偉大を平凡化し、莊嚴を低劣化する必要は毫末もありません。當に必要なのみならず、却つて總てを至高至善の段階にまで引上げることが吾等の志でなければなりません。不幸にして明治以來の吾國の史學界の傾向が、他國に冠絶せる吾國の歴史を、世界的平凡點に引下げんとするに在りしかの如く思はれるのは、吾等の最も遺憾とするところであります。他の民族が貴ぶべき歴史を有せず、他の國家が雄渾なる理想を有せざる故を以て、吾國もまた然りと考へるのは、以ての外の本末顛倒であります。九十九匹の猿に鼻がないからとて、自分の鼻を否定し去るやうな愚は、吾等の決して學んでならぬことであります。それ故に私は、私の觀るところに従ひ、いろいろな點から日本歴史の特性を明かにし、日本並に日本民族の偉大を立證しやうと思ひます。

御存じの如く奈良の正倉院は、聖武天皇の御遺物を東大寺に奉納し、之を收藏して居る建物であります。其中には支那はいふまでもなく、西域又は歐羅巴から傳はつた物まで其儘に今日まで儼存して居り、火鉢の中には千有餘年以前の奈良朝の灰までが残つて居るのであります。亂暴な人間があれば容易に破り得る木造の建築であります。それが戰國亂離の時代に於ても一人の之を侵す者なく、また兵火の災厄にも遭はず、建物と共に其中の御物が完全に今日まで傳へられて來たといふことは、實に驚くべき事實と申さねばなりません。

然るに翻つて考ふれば、日本國そのものがまさしく一個の正倉院であります。若しくは正倉院は日本そのものの象徴であります。何となれば日本國に於ては、常に上古に於ける民族固有の思想信仰が、脈々として今日に傳へられて居るのみならず、すべての外來の思想文明を今日まで生命あるものとして保存したからであります。恰も正倉院の御物の中に、支那や西域に求むべからざる幾多の藝術品が残つて居るやうに、日本文明のうちには本國の支那や印度に於て亡び又は衰へたものが潑瀾たる生命を以て生きて居るのであります。支那思想の精華、従つて支那文明の根據は、いふまでもなく孔孟及び老莊の思想であります。之を孔孟の思想即ち儒教について見ますれば、支那はついに儒教を生かすことが出來ず、儒教もまた支那を救ふことが出來なかつた。これは支那の歴史を讀めば明瞭なことであります。なるほど儒教に關する議論は盛んに行はれた。汗牛充棟もたゞならぬ書物が著はされた。それにも拘らず儒教の精神は支那の國民生活の上に實現されなかつたのであ

ります。然るに吾國に於ては、荒道稚郎子皇子の自殺が悲壯に立證する如く、儒教傳來の當初より最も忠實に孔孟の教を躬行實踐せんと努めました。而して儒教に含まれたる非日本の要素を排除し、よく之を消化して、國民の道德的並に政治的生活を向上するに役立たしめ、以て今日に及んで居ります。老莊の教も同然で、今日支那では老莊の思想は迷信的な民間信仰と結び、所謂道教として行はれて居ります。さり乍ら道家が利用する老莊思想は老莊の眞精神の甚だしき牽強附會か、さも無くば腐敗墮落であります。然るに吾國に於ては老莊の思想が國民的生命の中に融合し、民族性の一特徴を作り上げて今日に及んで居る。例へば吾等が枯淡閑寂を愛するところ、さびを愛するところ、しぶみを愛するところは、實に之を老莊と禪とに負へるものであります。而して此の心は、わが國民の藝術的宗教ともいふべき茶道並に華道として發達し、國民をして能く一椀の茶に全人生を味ひ、一輪の花に全宇宙の美を賞する幽遠典雅なる情緒を養はしめて居るのであります。

これは印度思想の精華ともいふべき佛教についても同様であります。印度の歴史が立證するやうに、佛教は印度を活かすことが出来ず、印度もまた佛教を生かすことが出来なかつた。現に今日の印度に於ては、たゞ錫蘭の一角に原始的な小乗佛教が僅に餘喘を保つて居るのみで、印度大陸に於ては全く其跡を絶つてしまひました。佛教は支那を経て吾國に傳はつたもので、支那は佛教の第二の故郷であります。曾てはあれほど盛大を極めたりしに拘らず、支那に於ても佛教は今や全く生命を失ひ、たゞ其の殘骸を留むるだけであります。然るに吾が日本に於ては、釋尊の思想信仰に孕

まれたる一切の要素が、其到るべき頂點まで發達せしめられ、印度にも支那にも見ざる純一にして深刻なる諸宗門を生み、今日尙ほ國民多數の宗教的生活を支配して居ります。日蓮上人は日本を以て『大乘相應の地』と申しました。適確に其通りであります。

吾等は舊きものを失はずして新しきものを抱擁し行く此の精神、その抱擁せるものを正しく生かし行く此の精神を、飽迄も保持し長養して行かねばなりません。吾等は日本をして永遠に『正倉院』たらしめねばならぬのであります。

二 日本精神の兩極性

さて日本が其の精神の裏に取入れた儒教と佛教とは、まさしく亞細亞精神の兩極であります。一は飽迄も世間的にして他は出世間的、一は飽迄も實踐的にして他は形而上的、一は飽迄も現實的にして他は超越的、一は飽迄も對立的にして他は絶對的であります。此の亞細亞精神の兩極が、實に日本精神のうちに見事に取入れられ、民族の最も誇るべき特性を形成して居ります。それは一面常に高遠なる理想を仰ぎつゝ、而も斷じて現實を忘るゝことなきこゝろ、最も嚴肅に現實の生活にいそしみつゝ、而も常に理想を思慕するこゝろ、理想と現實とを相即せしむるこゝろであります。現象即實在といひ、理想即現實といひ、娑婆即寂光土といふことは形而上學的論議としては珍らしくありませんが、何の議論も理屈もなしに、この深奥なる眞理を生活の上に實現しつゝあるところに吾等は吾が民族の偉大を認めずに居られませぬ。わが國民は大乘の極意を何の苦もなく實踐躬行し

て行く。私は是くの如き精神の最も見事なる代表者として、織田信長を擧げることが出来ます。信長の日頃愛誦して措かざりしは『敦盛』の舞の曲の『人生五十年、化轉のうちを比ぶれば、夢幻の如くなり、一度生を得て滅せぬものあるべきか』といふ一句であつた。彼が生涯の運命を決すべく桶狭間の戦に出陣する間際にも、彼は起つて『敦盛』を舞ひ乍ら高らかに之に誦したことは世間周知の語草であります。信長は常に人生僅か五十年と覺悟を決めて居た。宇宙の悠久に比ぶれば人生の如何に果敢なきかを身にしみて感じて居た。若しこれが印度人又は支那人であつたならばこれほど深刻に諸行無常を悟れば、出家隱遁して世間と離れるのを常とします。そして多くは宗教的生活又は風流の生活に身を委ねるのであります。然るに信長は、人生五十年と觀念し、生者必滅と悟り乍ら、人身を受けて此世に在る間は、人生を律する法則を嚴かに守りて、善戰健闘倦み疲れるを知らなかつたのであります。これは獨り信長のみでなく、典型的日本人に等しく見るところの勝れたる特性であります。

私は曾て東京郊外赤羽の靜勝寺といふ寺で、太田道灌の木像を見たことがあります。此像は道灌の恩願を受けた雲綱といふ僧の刻んだものと言ひ傳へられ、身には道服を纏ひ、手に拂子を持ち、片膝を立て、左側に小刀を置いて居る見事な作であります。道灌は御存じの如く、關東第一の武者であつたが、輕卒暗愚なる主人上杉定正のために、入浴中に暗殺された人であります。彼は此の不意打に遭つても毛頭惡びれず、突込まれし槍の柄をしつかと押へ乍ら

かゝる時さこそ命の惜しからめ

かねてなき身と思ひ知らずば

といふ辭世を詠み、泰然として死に就いた。私は靜勝寺の木像を見て、非常な感激に打たれたのであります。それは生をあきらめ死をあきらめつゝ、而も武士としての本分を徹底して果さずば止まぬ日本人の面目を、其の木像に於て見たからであります。私は同様の例を枚擧するに堪えない。たゞ理想と現實とを相即せしめ、決して一方に偏せざる所に、日本民族性の偉大があることを力説するに止めて置きます。而して此事は明治維新の元勳の一人、横井小楠の次の詩に最も簡潔に詠み盡されて居ります――

不_レ流_二功利_一不_レ流_レ禪 大丈夫 心_二希_三聖賢_一

終_レ生_二盡_三得_レ堅_レ苦_レ力_一 披_二雲霧_一欲_レ見_二青天_一

さて後代に於ける日本人の超越觀は、主として佛教によりて養はれ、現實觀は儒教によりて鍛はれたものでありますか、この理想と現實とを相即せしむる素地は、すでに上古の日本思想、儒佛以前の日本精神に、明かに具はつて居たのであります。古事記及び日本書紀によつて知り得る如く、吾等の祖先は世界を分ちて高天原、中國及び根國の三として居ました。高天原は理想の世界、中國は現實の世界、而して根國は質料の世界であります。現實の世界は、理想によつて質料を統制して行くことによつて、不斷の發展を遂げて行くのであります。而して中國の君主並に臣民が、高天原

から降臨したといふ信念は、理想と現實の關係が密接不離なることを體得したから生じたものであります。斯様な性質を具へて居たればこそ、日本民族は能く亞細亞精神の兩極を攝取して、其魂をいよいよ深刻偉大ならしめることを得たのであります。

ダンテの神曲は、私の愛讀措かざるところのものであります。ダンテは此詩の中に於て、ユダとブルタスとを共に地獄のどん底に投げ入れて居ります。ユダは基督を賣れる者、即ち精神の王國を亂る者であり、ブルタスはシーザーに叛ける者、即ち現實の王國を亂る者であります。此の二つの王國は相即不離のものなるに拘らず、歐羅巴わけてもダンテ時代の歐羅巴に於ては、嚴刻に此の兩者を對立させて居ました。従つて基督とユダとを問題とする人はシーザーとブルタスとを念頭に置かず、シーザーとブルタスとを念頭に置く人は、基督とユダとを問題としなかつたのであります。かやうな時代に於てダンテが、基督とシーザーとを同功とし、ユダとブルタスとを同罪としたことは、彼れの精神の明朗透徹を物語るもので、歐羅巴人としては稀有絶群の識見と申さねばなりません。而もかくの如き識見は、日本人に在りては、尋常茶飯のことであります。眞個の日本人は皆な此の道理を實行の上に現はして居ります。さればこそ吾等は『禪』即ち抽象的理想に溺れず『功利』即ち淺薄なる實利主義に囚はれず、能く中道を濶歩して來たのであります。

三 日本精神の偉大性

如何なる川も決して初めから大河ではありません。黄河、楊子江の大を以てしても、その源に溯

ればつひに谷間の小川に過ぎない。たゞ幾多の支流を合せ、落ち來る總ての水を東海に嚮はしめ行く間に、おのづから千里の長江となるのであります。まことに一切の長江大河の偉大は、己れに注ぎ入る一切の水に、嚮ふところを與へることに存する。そは斯くすることによつて、同時に己れを豊かにし、大きくし、強くするのであります。

このことは吾等の精神生活に於ても適切に同一であります。個人の魂、而して民族の魂は、決して生れながらに豊富莊嚴偉大なのでありませぬ。博く學び、濃かに思ひ、篤く行ひながら、その魂に入り來る一切を抱擁して、嚮ふところを之に與へることによつて、歩々偉大となつて行くのであります。それ故にニイチエは『偉大とは方向を與へることだ』と道破して居ります。方向を與へること、嚮ふところを知らしめることが、取りも直さず偉大なる魂の力であります。此力を具へたる魂は、總てを受け容れて己れの魂を偉大にし、豊かにし、且かくすることによつて一切のものに眞個の意義と價值とを與へるのであります。

然るに方向を他に與へるためには、必ず自ら目指すところがなければなりません。これありて初めて總て己れに入り來るものを率ゐることができ、また總てを率ゐつゝ己れを偉大ならしめることが出來ます。目指すところ、魂の嚮ふところは、言ふまでもなく理想であります。それ故に吾等の魂の充實と發展とは、確乎不動の理想ありて初めて可能であります。日本精神が亞細亞精神の兩極を攝取し、之によつて自らを豊富深刻ならしめると同時に、その故國に於てさへ不可能なりし兩者

の眞個の意義と價值とを發揮せしめることが出来たのは、言ふまでもなく日本精神が一切に方向を與へる力を具ふるためであり、而して能く一切に正しき方向を與へることが出来たのは、取りも直さず正しき理想を抱く故であります。

然らば其の理想とは何か。吾々の祖先が此國を肇むるに當り、全心全靈を擧げて確立せる理想は實に『あまつひつぎのみさかえ、あめつちともにかぎりなけむ』ことでありました。げに日本建國の理想は此の一句に盡され、此の一句こそ古事記、日本書紀の中軸となつて居るのであります。古事記、日本書紀の神代卷に於ける自餘一切の立言は、要するに此の一事を莊嚴するためのものと、いふことが出来ます。もとより記紀ともに天地の開闢を説き、宇宙の生成を説いて居る。何となれば日本民族は、祖宗以來の天地開闢に關する思想信仰を傳承して來たからであります。而して吾等は其の開闢説を通して日本民族本來の特性を認識し得るが故に、それは吾等にとりて珍重至極のものであります。さりながら記紀の神代卷は、猶太の創世記や印度の俱舍論のやうに、宇宙生成そのことを主題とせるものでなく、その専ら心血を注げるところは、天壤無窮なるべき皇室の淵源を明かにし、皇統の由來するところ悠遠にして森嚴なるを力説するに在つたのであります。

萬世一系の理想は餘りに屢々口頭に上せられた爲に、今の世の人々は却つて其中に含まるゝ深奥なる意義を反省しやうとせぬ傾きがあります。而も單に之を其の外面のみに就て見るも、古代諸國の建國理想のうち、かくの如く雄渾にして確信に充ちたるものが他にもあるか。吾等の知る限りに

於ては、僅に秦の始皇帝が朕を始皇帝として、二世三世より萬世に傳ふべしと豪語したのがあります。而も實際は僅に二世にして亡國となつてしまひました。支那の學者は始皇帝の抱ける如き萬世一系の理想を以て、罵笑すべき不可能の夢となし、革命即ち王朝の交替を當然の事としたのであります。然るに吾國に於ては支那に於て談話の種にされる此の理想を奉じ、能く之を實現して今日に至り、盡未來際に及ばんとして居ります。それはまさしく人類の歴史に於ける一個の不可思議であります。曾てマコーレーは、羅馬法王朝について下の如く論じて居ります。——『地上に於て人間の作りし事業のうち、羅馬教會の如く研究の價值あるものは稀れである。この教會の歴史は、人類文明の二大時期を繋ぐものである。犠牲を焼く煙がパンテオンより上りし時、フラビアの圓戯場にジラフと虎とが驅けまわりし時まで人心を潮らせ得るものは世界に於て唯だ此の教會だけである。世界に於て其の系圖の遠きを誇る最も永續したる王室も、之を法王朝に比すれば其の年齢は赤子の如く稚い』と。わが皇室は法王朝に比して一層久しい歴史を有して居る。若しマコーレーにして日本の皇統連綿を知つたならば、一層其の驚きを大にしたことと思ひます。

四 皇統一系の内面的意義

天つ日嗣、天壤と共に無窮なることは、更に重大なる内面的意義を有して居ります。わが日本民族は、此の理想を堅確に把持し來れるが故に、今日在るを得たのであります。皇統が萬世一系なるためには、日本民族が萬世に獨立し繁榮することを必須の條件とします。それ故に萬世一系といふ

ことは、直ちに日本國家の永遠の發展を意味して居ります。國亂れて民亡ぶ。而して國亂れ民亡ぶ原因は、如何なる例外もなしに、主權が薄弱微力となるからであります。それ故に日本の古典が、日本を以て『天雲の向伏す限り、谷蟻のさ渡る極み、皇御孫命の大御食國』となし、若し『御代々々の間に、まつろはぬ穢き奴もあれば、神代の古事のまに／＼、大御稜威をかゝやかして、たちまちに打滅ぼし給ふものぞ』として、吾國の主權を万古不動の礎の上に置きたることは、まさしく國家永遠の繁榮の礎を置いたものであります。

試みに隣邦支那を見よ。支那に於ける主權の基礎は、天命であります。即ち天が有徳者に命じて君主たらしめるのであります。例へば書經に『天、有徳に命ず』といひ、或は『天、有罪を討つ』といひ、或は『有夏罪多し、天、命じて之を誅せしむ』といひ、或は『商の罪盈貫し、天、命じて之を誅せしむ』とあります。上天は有徳者に命じて君主たらしめる。而して君主その徳を失へば、上天は命を革めて他の有徳者を君主たらしめる。これが支那の主權に關する根本思想であります。この思想は一見甚だ合理的であり、有徳者が國家を統治すればこれほど幸福なことは無いやうに思はれますが、實際には幾多の困難が伴ひます。何となれば、徳の有無優劣を定める客觀的標準は何處にもありませんから、徳の有無といふことは、ついに力の優劣といふことになるからであります。支那の歴史はそれ故に幾度となく禪讓放伐を繰返して今日に及び、其間未だ曾て眞個の舉國一致を知らず、未だ曾て其の民族國土を防護するの力を養ひ得なかつた。さればこそ四億の大民族を以て

して、夷狄と侮蔑せる異民族の征服をも受けねばならなかつたのであります。日本が東海の小嶋嶼に據り、數千萬の民族を以て、能く支那の如き運命を免れ得たのは、苟くも國家に危險の迫る毎に天皇の號令の下、舉國直ちに一致して國難に當り得たからであります。従つて吾等は、日本の皇統萬世一系なることが、同時に國民福祉の根源なることを切實に反省しなければなりません。

かくの如くにして吾國は、君民一體、古今一貫、未だ曾て異國の侵略征服を受けず、未だ曾て國家的生命の中絶を見ずして今日に至れることが、取りも直さず日本精神を偉大ならしめた最後の原因であります。この生命の一貫不斷あるが故に、舊を失ふことなくして新を抱擁し得るのであります。日本の生命が中絶せざる故に、一たび吾國に攝取せられる思想文明は、日本の生命と共に永遠に生きて行くのであります。

第六 興國運動の原理

一 世界戦の意義

世界戦至高の意義が、革命歐羅巴と復興亞細亞とを、五年に亘る亂離と苦惱の間から生み落とすに在つたことは、吾等の堅く信じて疑はざる所であります。革命歐羅巴は、其の最後に落着くところが如何なる相を取るにもせよ、先づ資本主義に對する社會主義の抗爭、換言すれば階級争闘に於ける勞働階級の擡頭として、最初の第一歩を踏み出だせることは、極めて當然の論理であります。復興亞細亞は、歐羅巴の奴隸たる亞細亞民族の獨立、並に歐羅巴壓抑の下に在る亞細亞諸國の眞個の自由、換言すれば民族争闘に於ける非白人の昂潮として現はるべきことも、また必然の行程であり、現に爾かく進みつゝあるのであります。

この意味に於て世界戦は、明白に來るべき世界革命の序幕であつた。來るべき世界革命は、其の本質に於て、また其の範圍に於て、人間の未だ曾て知らざりし、深刻にして廣汎なるものであります。それは先づ歐羅巴其者の革命であります。何となれば歐羅巴現在の共同生活が、其の組織の根柢に於て否定せられ、新しき原則の上に新しき社會秩序が樹立されやうとするが故であります。それは更に文字が示す如く、世界全體の革命であります。何となれば歐羅巴の利益——一層精確には歐羅

巴の物質的利益を根本の動機として組織されたる現在の世界が、同じく根柢より改められて、人類全體の向上登高を原理とする新しき國際關係が、これによつて出現しやうとするが故であります。

此の雄渾森嚴なる世界の過渡の時代に於て、最も勇敢なる人類の戰士として、吾等の前に其の偉大なる姿を現はし、無限の教訓を垂れつゝある幾多の英雄のうち、最も吾等の心を惹く者は取りも直さず露西亞・土耳其・印度に於ける三人の大丈夫——レニンとガンデイと而してケマルとであります

二 レニン

單に之を表面に就てのみ見ましても、三人の志業は眞に驚嘆に値します。最初に現はれて最初に世を逝れるはレニンであります。彼れの金剛の努力は殆ど人間業とも思はれぬほどのものであつた。不斷に内外兩面の敵と戦ひ、極度の飢寒に苦しめられ、屢々没落の危機に瀕しつゝ、能く一切の難局を透貫し、困難其者の裡より常に新しき力を得來り、混沌其者の間より強大なる政治的並に軍事的機關を組織して、終に新しき社會秩序の基礎を築き上げたレニンの勇猛精進は實に人間の力の奇蹟であります。

彼によつて代表せらるゝ露國革命の價値は、其の社會的價値に存するに非ず、また現在の勞農政府の存續如何に存するのでもありません。吾等に取りて最も重大なる教訓は、レニンの號令の下に一個偉大なる國民が、徹底して過去の制度を顛覆し、全然新しき社會秩序の創設のために、全力を擧げつゝあると云ふ事實其ものであり、而して此の事實の根柢に潜む確信と勇氣とであります。古

へより今に至るまで、眞に人類の向上を激成せるものは、唯だ是くの如き確信と勇氣とであつた。

加ふるにレニンは、歐羅巴精神の権化たる點に於て、大いに學ぶべき所ある。希臘思想と基督教とに養はれ、更に近世科學によつて鍛えられたる歐羅巴精神は、其求むるところの自由、其希ふところの平等、其の抱くところの友愛を、最も美事に實現すべき共同生活の組織制度の發見並に確立のために、高貴なる努力を續けて來たのであります。佛蘭西革命の期する所、また實に此外になかつた。そは民主主義の精神に則り、所謂政治的自由と法律的平等との制度を確立して、人類の向上を圖らんとしたのであります。佛蘭西革命が、世界史に偉大なる貢獻ありしは、更めて説くまでもない。而も其後百年ならずして、吾等の現に見るが如き社會的平等、經濟的掠奪、黄金と器械との唾棄すべき支配が、却つて世界を地獄たらしめんとするに至り、茲に理性と科學との力を持ち、經濟組織の革命によつて共同生活の福祉を實現せんとする社會主義の唱導となり、レニンは、其の徹底せる實行を敢てしたのであります。故にレニンは、其の魂の全力を擧げて、外面的制度の確立、器械的・自働的なる人類の福祉を生み出だすべき組織の實現に傾倒したのであります。

吾等の眞に知らねばならぬことは、社會主義其ものゝ是非善惡に非ず、レニン其人の成功失敗に非ず、實に彼れの努力の中に抱有せらるゝ歐羅巴精神の意義、並に彼の努力によつて指示されて居る歴史の方向であります。

ニ ガン デ イ

レニンを去つてガンデイに參ずれば、同じく人類の戰士であり乍ら、實に白雲萬里の感なきを得ませぬ。而してレニンとガンデイとの相違は、歐羅巴精神と亞細亞魂との相違に他ならぬことが、限りなく吾等の心を惹きます。ガンデイの志す所は、印度の解放である。而も此れの論理は、彼れの夫れと全く根柢を異にして居ります。ガンデイ渾身の努力は、印度に於ける英國統治の掃蕩に在る。而も此れの戰術は、彼れの夫れと截然として似もつかぬものであります。

ガンデイはレニンと異なり、曾て革命を口にしない。ガンデイは國家の組織、社會の制度に就て更に言及する所ない、彼れの説く所は、印度人の魂の解放であります。其の期する所は、印度人をして眞理に即する正善の生活を實現せしむるに在ります。英國の印度統治は、印度人を奴隸とするが故に、即ち印度人の人格を否定し、其の道德的獨立を奪ふが故に、印度に於ける萬惡の源である英國統治が印度に齎らす所の物質的幸福の如きは、固より問題でない。假令英國が印度人に如何なる物質的幸福を與ふるにもせよ、印度人の人格を蹂躪し、根本に於て之れを物として取扱ふ時に、其れが果して何を意味するか。是くの如き幸福に満足するものは、美衣と美食とを與へられて喜悅する娼婦の徒である。故に此の萬惡の源は斷乎として除去せねばならぬといふのが、實にガンデイの主張であります。

而もガンデイに従へば、此の邪惡と戰ふに、決して暴力を以てすべきでない。レニンが一切の權謀術數を辭せず、流血殺戮を辭せざる時、ガンデイは即ち惡を英國と共にせざることより戦ひを始

めよと説く。之が爲に彼は、主力を盡して眞個の人間としての自覺を印度人の魂に喚起し、之によつて彼等の現状の忍ぶ可からざる所以を悟得せしめ、而して之れを脱出せんとの精神的勇氣を振作せしめんとするのであります。曾て英國皇太子が、印度を巡遊せる時、同志の或ものは之に暴力を加へんことを主張した。ガンデイは敢然として之を斥け、諸公にして其の決意を翻さざる間、予は食を絶たんと宣言して、斷食三日に及び、遂に同志をして陰謀を放棄せしむるに至つたこともあつた。彼れの制止なくんば、英國皇太子の安危、決して逆賭し難かつたのであります。印度官憲は、英國皇太子一度び印度を離るゝや此の恩人を捕へて牢獄に投じた。而もガンデイは怨む所なく憎む所ないのであります。

眞理把持を主義とし、暴力によらざる非協同を原則とするガンデイの運動が、如何に印度人の魂を深く且汎く支配するに至りしかは、此處に説くを須むぬであらう。印度の如き政治的事情の下に簡程まで廣汎なる國民運動の發展がガンデイによつて遂げられたと云ふことは、レニンの場合と同じく、一個の奇蹟として驚異するに足るのであります。

レニンとガンデイが最も甚しき對立をなし乍ら、而して最も異なる方法によつて戦ひ乍ら、等しく非常なる大業を成就しつゝあることは、表面極めて不可思議に見ゆるに拘らず、更に奥深く辿り往けば寧ろ正常なる理由の存するを了得するに難くありません。ガンデイの運動が、火の原を燒く如くなる所以は、其の掲げる所の理想が、適確に印度的であり、其の執る所の戦術が、徹底して

印度的なるが故である。一切の腐敗と墮落とに拘らず、吠陀書頌に最初の魂の聲を表現して以來、印度の求め來れる所は、實に深奥幽玄なる精神的原理の體得であります。精神の高根の絶巔を窮むることに比ぶれば、塵の世の總べては第二義のものとせられ、之に執着することは厭ふべき煩惱として斥けられて來た。獨り印度のみならず亞細亞全體が、多かれ少なかれ此の基調の上に立つて居ります。亞細亞に純乎たる科學的研究の起らざりし所以、社會制度の周到緻密なる研究の起らざりし所以は、其の最後の原因を此處に求めねばなりません。

故にガンデイ以前、西歐の革命主義に則り、西歐の革命運動に倣つて起てる幾多印度志士の努力は、西歐教育を受け、西歐精神を呼吸せる青年を感激せしむるに足りたが、遂に排英運動を眞個に國民的たらしめることが出来なかつたのであります。ガンデイ出で、精神的指導者として起つに及び、國民は翕然として彼れの指揮を仰ぎ、精神運動が國民的に政治的革命運動たるに至つたのであります。それ故にガンデイの目的は、印度が露西亞に非ざる限り、レニンと同一戦術によつて遂げらるべくもありません。従つて其のレニンと全く趣を異にせる所以が、即ちガンデイの勝利の原因であります。

四 ケマル・パシヤ

印度を去つて土耳其を望めば、ムスタファ・ケマルが、秋霜の劍を提げて三軍に號令して居る。彼れの面目は、レニンの如くならず、またガンデイの如くでない。ケマルとは、土耳其語に『眞直』

を意味し、彼が年少サロニカの陸軍幼年學校に學べる頃、彼を愛撫せる數學の教師ムスタファが、純一卒直なる彼れと同名の學生の爲人を愛で、選んで與へた名前であります。二十二歳にして士官學校を出で、陸軍少尉として軍隊に入つてから、四十七歳の今日まで、彼は其の名の如く眞直に軍人として終始一貫した。レニンは、日露戰爭當時に於て、既に其の鋭き鋒を現はし、明石將軍の如き、彼が必ず大事を成すべきを豫言して居たことでもあります。ガンデイは、十數年に亘る南阿の善戰健闘によつて、其の崇高なる人格が世に知られて居た。世界戰の當初、詩人タゴールと共に日本に來りし英人ピアスン君は、ガンデイの名が未だ曾て日本人の口に上らざりし頃、既に印度に救世主たるべき者として、絶大なる期待を彼に屬して居ました。私自身もピアスン君の口から初めて彼の名を聞いたのであります。ケマールは之と異なる。固より彼が軍人としての才能は認められて居た。殊に世界戰に當り、第十師團長として、ダーダネルスの戰に英軍を撃退して偉勳を現はしてから、彼れの軍事的天才は土耳其全國に認められたけれど、而も此時でさへ、土耳其の存亡回教徒の政治的興廢が、彼れの双肩に荷はせられて居たことは、恐らく何人も想到せざりし所であつた。彼れの使命が、露堂々と現はれたのは、土耳其が衰頹のドン底に陥つた時、青年土耳其黨の三首領タラト、エンゼル、及ジエマールが、敗軍の將相として没落せる時であつたのであります。聯合軍と土耳其との間に休戦が成立した時、ケマールはパレスティナの戦線にアレンビー將軍と戰つて居たが、休戦の電報に接して君府に歸り、聯合軍の横暴を目撃し、且君府に止まりて策の施こ

すべきなきを知り、アナトリアに赴きて事を擧げ、土耳其國民主義の最後の戰士として、勝利に誇る全聯合國に堂々と挑戦しました。此時に於てケマルの旗下に集れるものは、彼れの人格と才幹とに傾倒し、且彼在るによつて土耳其復興の可能なるを信じたる若干の同志に過ぎず、世界は唯だ其の無謀を笑ひ、或は唯だ其の志を憐んだのであります。ケマルの宣言は、簡潔明瞭である。曰く『吾等は敵に強ひられたるが故に戦ふ。何となれば吾等の敵は吾等自身の國土に於て、吾等を奴隷たらしめんとするが故である。吾等は、自身の國土に於て、獨立を要望する。こは一切の國民に賦與せられたる權利、一國が他國に拒むことを許さぬ權利である』と。かくて數年の後、遂に能く土耳其復興の基礎を築くを得た。彼なくば土耳其は明かに世界地圖より抹殺せらるべき運命に在つたのであります。

さて土耳其に於て、偉大なる軍人及之に率ゐらるゝ軍隊が、國民的權利並に自由の戰士として、國民運動の中心となりしことは極めて當然の論理であります。サア・ウイリアム・グレゴリは、曾て埃及に及けるアラビ・パシヤの運動を論ずるに當り、下のやうに申して居ります。曰く『東方諸國に於て、政治運動の主體は、常に軍人である。彼等のみが能く其の目的を遂行すべき統一と勇氣とを有する。其他の人民は、殆ど不平さへも漏らし得ず、毛を剪られ肉にせらるゝ羊の如くである』と。波斯・埃及・土耳其の如き國家に於て、グレゴリの言は適確に肯綮に當つて居ります。殊に土耳其の場合に於ては、一九〇八年の革命も、今度の勝利も、共に軍人並に軍隊によつて行はれ

た。かくて土耳其の救済者が、労働階級の戦士に非ず、精神運動の指導者に非ず、軍人の間に出でたことは天意眞に測るべからざるものあるを想はしめるのであります。

五 日本に起るべき運動

吾等は世界史の新しき頁を書きつゝある三人が、截然として獨自一己の途を歩みつゝある事實の意味を明瞭に把握しなければなりません。此等の三人のみと言はず、伊太利のムツソリニ、波斯のレザー汗、亞富汗斯坦のアマスラー王の如き、苟くも當世に於て興國の大業に拮据し、多かれ少なかれ其功を擧げつゝある者は、一として皆ならざるは無い。蓋し一切の國家は、國民的精神の創造であり、同時に其の精神を保持し長養する絶對の組織體であります。それは民族の性情と獨特の歴史とを經緯とする獨一無二の國家的個性を有するが故に、其の進むべき路も亦自ら異ならざるを得ませぬ。従つて一切の興國運動は、決して他國の模倣するを許さない。それは夫々の國民精神の眞個の體得者によつて、其國獨自の理想と方法とによつて行はるべきものなること、現に幾多の英雄が吾等の目前に之を立證しつゝある通りであります。

かくて一切の國民運動の成敗を卜すべき最後の準則は、實に其の運動が國民的なるや否やに存します。孰れの國の國民運動にせよ、若し夫れが模倣的であり、輸入的であり、直譯的であるならば假令一時の成功を贏ち得るとしても、斷じて有終の美をなし難い。之に反して若し其の運動が、深く國民本來の精神に根ざし、運動の各部門に於て、躍如たる國民性の發露を認め得るならば、其の

壯心烈志は晩かれ早かれ實現されるのであります。

然るに従來亞細亞諸國の復興運動又は革命運動に於ける共通の妄見は、實に亞細亞を近代化又は西歐化することによつて、亞細亞を隆興せしめ得べしと考へることであつた。甚しきに至つては、是くすることが興國の唯一路なるかにさへ考へて居た。例へば青年土耳其黨の目ざすところは、土耳其を佛蘭西化せんとすることであり、前期印度革命黨の理想は印度を英國化するに在つた。而して是くの如き運動は、固より全然無意義ではなかつたが、終に失敗に歸せざるを得なかつたのであります。興國とは、如何なる例外もなく其國に内在する昔ながらの生命が、機運熟して新しき力を帯びて捲土重來することであり、それは各國自身の『本然』の復興たるべくして、斷じて他の『本然』の追従たるを許されない。日蓮既に説破すらく『法は必ず國を鑿みて弘む可し。彼の國に好かりし法なれば、此の國にも好かるべしと思ふ可からず』と。宗教尙且然り、社會制度・國家組織の如き、尙更のことなるは言ふ迄もありません。

いまの日本には、レニンに倣ふことを極惡と罵り乍ら、或はムソリニに倣はんとし、或はガンデイに倣はんとする改造論者が居ります。而も模倣の非なる點に於て、其間に何の徑庭もあるべき筈がない。若し夫れ他山の石としてならば、三者等しく以て吾を磨くに役立つであらう。現にレニンの努力の中に含まるゝ歐羅巴精神は、吾等の學ばねばならぬものゝ一つである。其の精神とは、實に組織の精神であります。組織若しくは外面的制度を過重することは、幾多批難すべき點あるに拘

らず、亞細亞諸國の必ず學ばねばならぬ點であります。政治的理想の闡明に於て、亞細亞は斷じて歐羅巴の後に落ちない。而も之を實現すべき方法の具體的研究に於て甚だしく貧弱であります。例へばガンデイの場合に於ても、善き魂は自然に善き制度を生むと嘯いて居ります。さり乍ら吾等は必ずや思を國家の制度に潜め、吾等の理想を實現するに最も適切なる組織を創造せねばなりません。而して其の組織が輸入社會主義たるを許さぬことは無論であります。

ガンデイに學ぶ可きところは、彼が印度に於ける萬惡の源として英國統治を指摘し、彈劾したる如く、日本の現實生活に於て、邪惡の根源となりつゝあるものを、ガンデイの如く畏るゝ所なく爬羅抉剔し、同時に求むべき具體的正義を明示することでありませぬ。若し然らずば竟に在來の陳套なる談義説法の外に出でぬであらう。善爲すべし、惡爲すべからずと云ふが如き抽象的道德を、如何に高聲に唱へたところで、日本の改造は期待せらるべくもないのであります。

吾等は、日本改造の秋が、次第に迫りつゝあるを思ひます。而して此の大業は、レニンに倣はず、ガンデイに倣はず、ケマルの跡を踏まず、日本精神の眞個の體現者によつて、日本的に斷行せらるべきを信じます。そは一人であるかも知れぬ。また一團であるかも知れぬ。吾等は、是くの如き者の既に儼存して、天の召喚を待ちつゝあるを信じます。そは今日に於て、夜の盜人の如く隠れて名もなきものであるかも知れませぬ。而も機運熟しなば、電光の如く現はれて、其の使命を果たすであらうと思ひます。

第七 復興せらるべきものは何ぞ

一 『敏感なる國土』

あらゆる意味に於て思ひ出多き此の震災紀念日に當り、諸君と共に深刻嚴肅に反省し、且つ反省し得たるところを諸君の前に披瀝する機會を與へられたことは、私の最も光榮に存するところであります。私の親友でポール・リシャルといふフランスの哲學者が居ります。大正四年から八年まで日本に滞在して、其間に『告日本國』といふ一篇を公けにし、日本には七つの榮譽があり、之に伴つて七つの大業あることを述べ、世界に對する吾國の雄大森嚴なる使命を説いて居りますが、其中にリシャル君は『大地は高遠なる希望を汝に屬す。大地が汝の脚下に震撼する時、大地が汝に向つて語らんとするところを覺れ。大地をして失望せしむる勿れ』と申して居ります。また他の箇處では『汝は多幸なる嶋嶼を城砦として其裡に建設せられたり。恰も是れ、繞らすに波浪の牆壁を以てし、海岸を以て警護とせる安全なる搖籃裡に長養せるに譬ふ可し。されど敏感なる國土に揺られたるが故に、不覺の甘睡に墮することなかりき』とも申して居ります。リシャル君が、大地震撼すると云ひ、敏感なる國土に揺られると申したのは、取りも直さず地震のことでありませぬ。吾がリシャル君の信念によれば、吾國に於て古來頻々として起る大小の地震は、日本國民を其の惰眠から喚び

醒まし、嚴かに反省させやうとする天意だといふのであります。

然るにリシヤル君が日本を去つて僅かに四年、吾等は非常なる地震に見舞はれたのであります。この地震は、單に地震としては吾國未曾有のものでないかも知れませぬが、地震後に起つた火災のために生じた災害の甚大なりしことは、恐らく日本に於て空前なりしのみならず、世界に於ても比類なき慘事であつたと存じます。即ち東京市だけに就て申しましても、焼失家屋四十餘萬戸、罹災者百十四萬、悲惨なる死を遂げた者が七萬を超え、焼失面積は一千萬坪以上に達し、東京の大半が焼野原に變り果てたのであります。而も是程の大變災であり乍ら、吾々は其の起る一時間前、否一瞬間前にも之を豫知することが出来ず、徹頭徹尾無用意の間に突如として襲ひかゝられ、たつた今まで華美と繁榮とを誇つて居た町が見る／＼焦土と化し、平和と幸福とを樂しんで居た人々が忽ち地獄の苦難に投げ入れられたのを目の當り見たのであります。これが天意であるか否かは人々によつて異見がありませうが、單なる一個の自然現象として見ますだけでも、吾々をして再思三省せしめねば止まぬ非常の出来事に相違ないのであります。

初め此の地震の報道が世界に傳へられました時に、外國では日本が此爲に再び起つべからざる程の深甚なる打撃を受けたものと考へ、日本の前途に對していろ／＼悲觀的な批判を加へ、恐らく内心では喜悅を感じながら、表面では日本の不幸を悲しんだのであります。アメリカの或る新聞の如きは太平洋の彼岸にある吾等の恐るべき競争者も、今度の地震によつて最早恐るゝに足らぬものと

なつた、今日以後太平洋は初めて其名の如く太平となるであらうとさへ論じたのであります。幸にして日本國民の潑刺たる活力は、幾多の困難と戦ひつゝ着々復興の歩を進め、東京の町々は震災以前よりも立派な街路、立派な建築を以て其の面目を日毎に新たに居ります。固より部分々に就て申せば遺憾の點も多い。第一復興計畫そのものが周圍の容喙によつて理想的に樹てられず、極めて不徹底なものとなつてしまつた。その不徹底な計畫を實行するに當つて、小さい利害の衝突から復興局と東京市との間に争があつたり、順序正しく工事を進めることが出来ずに、折角出来たと思つた道路が幾度も掘返へされたり、架けても渡れない橋があつたりする上に、復興事業に絡まる不届至極なる疑獄が起つたりして、實は昭和三年即ち本年度に計畫の完成を告ぐべき筈であつたのが、御覽の通り延期を餘儀なくされて居るのであります。それにしても諸外國があれほど見届つて居たに拘らず、只今までに區劃整理は八割、道路は五割四分まで進行し、全工程の七割強まで漕付けたことは、諸君と共に慶賀してよいと思ひます。此間のいろいろの経緯などを考へますと、吾々は目に見えざる何者かに導かれて、喧嘩をしたり怠けたりして居り乍ら、行くところまではぐんぐんと引張られて行くやうな氣が致します。この見えざる偉大なる力、部分々々を見れば人間の小さい利害、小さい争鬭、小さい意地で混沌紛糾を極めて居る東京を、全體から見ればいつの間にか復興させて行く此の偉大なる力は、吾々をして敬虔の念を抱かしめねば止まぬものがあります。私は此の偉大なる力を認めますが故に、復興の必ず完成すべきを信じて諸君と共に慶賀するのであ

ります。たゞ私は此の機會に於て、破壊並に復興といふことに就て、一層立入つて考へて見たいと思ひます、道路や建物を再興するだけで吾々は満足してよいか、若しそれだけで満足出来ぬとすれば、本當に復興せらるべきものは何か。私は之に就て諸君と共に反省したい。

二 震災後の『文化日本』

震災直後あの困難のどん底に於て、東京市民の擧げた勇しい聲は、復舊に非ず復興だといふことでありました。震災以前に復るのでなく、一層立派なものを造り上げるといふ意氣込で、粗末な衣服を着け、簡単な食物を取り、死物狂ひで努力しやうと覺悟だけはしたのであります。それ故にあの地震は神罰であると恐懼した人々があつたと同時に、之を以て天祐であると喜んだ人々もあつたのであります。それは此の地震によつて、世界大戦以來日本の上下に漲つて居た成金氣分が、根底から叩き壊されたと考へたからであります。大正十二年と申せば、成金の凋落するものは凋落し去つて、實は成金時代が過ぎ去つて居たに拘らず、成金氣分だけは依然として残つて居た。その成金氣分の宿醉が、大地震によつて醒まされるだらうと信じたのであります。

私は地震によつて成金氣分が一掃されたことは事實であると信じます。國民の精神が緊張したことも事實と信じます。さり乍ら不幸にして其の緊張は永續しなかつた。永續させるためには政府當局を初め、日本の上流階級が餘程の努力を必要としたのであります。上に在る者ほど早く精神の緊張を失ひ、心に油斷を生じましたので、國民も自然と氣が弛んだのであります。私は屢々吾國の

指導階級から、國民の緩怠を責める聲を聴きますが、私は『諸君は如何』と反問したのであります。若し『吾は當時の緊張を失はず』と言下に答へ得る人ならば、其人は國民を責める資格があります。自分はさつさと暢氣な昔に立歸つて、國民だけを鞭撻しやうと思つても、それは無駄なことでもあります。上が緩んで来るから尙更下も緩む。従つて假令成金氣分は地震と共に無くなつたとしても、之に代つて一向面白くない氣分が社會に漲つて来るのであります。

然らば其の氣分は如何なるものと申せば、適當な言葉を考へ付きませんから假に文化氣分と名づけて置きます。此の氣分が具體的に現れたのが、取りも直さず地震後に流行し始めた所謂『文化的生活』であります。文化住宅、文化草履、下つては文化井などもあります。其等の總てに共通なる性質は、表面だけをつくらつて内實はつまらぬといふことであります。従つて、『文化』と名のつくもので堂々たるものは一つもない。一時凌ぎのものでなければ誤魔化しものだけであります。而もそれが概ね最も淺薄な西洋模倣に過ぎないので一層驚き入る。西洋を模倣して一時を間に合せの氣分が、地震以後の日本を支配するに至つたとすれば、それは決して喜ぶべきことでない。舊き東京、従つて東京によつて代表される舊き日本が終局を告げて、新しき東京、新しき日本が是れから興るのだといふ思想が、震災直後の人々に宿つたのであります。若しも現に見るが如き『文化的』日本が、期待されたる新日本であるならば、あの地震は天祐どころか、實に二重の災厄を吾國に與へたものであります。復興せらるべきものは斷じて斯様なものであつてはなりません。

地震の有無に拘らず、吾等は日本を改造せねばならぬ破目になつて居るのであります。唯だ地震は國民に一層此の覺悟を強めさせただけでありませぬ。地震が吾々に破壊して見せたものは何か、思ひ切つて灰燼に歸せしめたものは何か。他なし歐米的東京、即ち歐米的日本であります。歐米文明の過度の崇拜によつて、本來の面目を蔽はれて居る日本の外面を打倒し去つたのが彼の地震である。之に包まれた内容を掃蕩して、新しき日本にあらず眞個の日本を復興するのが、國民總體の仕事でなければならぬ。然るに眞個の日本の代りに、以前にも劣る淺薄な歐米的日本が現出したとするならば、吾々は明白に誤れる道を歩んで居るのであります。従つて正しき道に復らなければならぬことは勿論であります。

三 歐米模倣の最期

先刻三土大藏大臣から、段々と財政經濟上の施設に關する政府の苦心のほどを拜聴し、其の辛勞に對しては諸君と共に感謝を捧げたいと存じます。而も政府の苦心努力に拘らず、最も嚴肅なる事實は國民の多數が年一年と貧乏になつて行くこと、國民生活が非常な勢で行詰つて行くことである。これには無論地震による經濟的打撃も加はつて居りますが、由來するところは遙に遠いことと信じます。いま其の遠近大小の原因を事細かに申上げる餘裕は持つて居りませぬが、最後の原因は明治以來歐米の制度文物を取入れて、日本を歐米化するためにのみ骨折つて來たことにある。日本の習慣や民情を仔細に考慮することなく、西洋のもので善さそうに見えたものは、悉く之を日本

に移さうとした。先程も大藏大臣から金融の話がありました。その金融制度にしても、日本に於て獨特の發達を遂げ、長年の歴史を有する頼母子講や無盡など、いふ庶民金融機關には一顧盼だも與へず、専ら西洋の銀行制度を採用して來た。その結果はどうかと申せば、今日の銀行は富豪のためには都合よいけれど、中流以下の國民には利用の途なきものとなつて居ります。それが次第に甚しくなつて、今や上の方には金が有り餘り、下の方には無一文といふ變調を來たして居るのであります。借りなくとも濟む人には銀行の方から何卒借りてくれと頼むし、借りなければ仕事を立てて行かぬ人には融通の途がない。これでは貧富の懸隔が急速に大きくなつて行く外ないと存じます。

ひとり金融制度のみならず、一般經濟組織そのものから、政治や教育の制度まで悉く西洋に倣つて變へてしまつた。國初以來重農主義・農村本位であつた日本を、急速に商工主義・都市本位の國家とし、西洋風の資本主義を經濟生活の基調としたのでありますから、資本主義經濟に伴ふ幾多の悲惨や弊害が、西洋に於けると同じく、又はそれ以上に日本にも發生することは自然の徑路であります。教育も同様で、是亦全然西洋の模倣である以上、モダンボーイやモダンガールが出來るのに何の不思議もない。西洋風の教育を施して、西洋臭い青年男女が出來たと云つて憤るのは、自分の影法師を罵るやうなものであります。現に文部省などで新しい計畫を樹てる場合には、いろいろの議論が戦はされるそうではありますが、可否の決定は歐米諸國に範例があるか否かによるとのことです。英國や米國や獨逸でも同様のことを行つて居ますと言へば、然らば可からうといふこと

になる。まことに不思議な次第と申さねばなりません。

斯様な事情が重なり合つて所謂社會問題が起つて來たのでありますが、昨今では各府縣に社會課なるものが設けられ、社會政策的な仕事をして居ります。ところが其の仕事がまた甚だ要領を得ないものであります。例へば私が地方旅行中の實見であります。或縣では縣民に勤儉を奨励する爲に氣の利いた標語や文章を印刷したピラを作り、縣廳の役人が自動車に乗つて其ピラを、汗水流して田の中で働いて居る百姓の上に撒いて居たのであります。これでは撒く方と撒かれる方が顛倒して居る。従つて勤儉の奨励とはならず、却つて反抗心を挑發するに終ります。また東京では時々蠅取デーなるものをやる。今日殺しても明日はまた繁殖するのに、少なからぬ金と人手を使つて之を宣傳するなどは氣が知れない。自分で考へたのでは斯様な馬鹿々々しい工夫が出る筈がないからこれも西洋でやるから行るが可いと云ふ筆法だらうと思ひます。同様にアメリカ邊りで流行する宣傳方法で、安全デーだの何々デーだのと、根本的方面を考へずに目先の派手やかな仕事をやる傾向が盛んであります。やる方では一生懸命であり、また決して悪い事ではありませんが、國民の方では一向有り難いと果つて居りませぬ。少くも本當に自分等の爲にやつて呉れて居る仕事とは感じて居りませぬ。それは西洋人の着物を持つて來て、日本人に着せるのであるから、ピタリと合はないのが當然であります。方面委員などいふものも同様で、人の世話をすることは善いとしても、世話される方では何とも思つて居ない。年末に餅を配布しても之を受取る方では當前のことと思ふか、

もつと無遠慮なのは何だ是れつばかり、といふ調子で人情恩顧を感じる點では世界無比の日本人が一向に感謝の念を抱かないのであります。其上に此の方面委員なるものが政黨に利用される危険あることは諸君が御承知の通りであります。斯様な委員を設けた利害得失は甚だ疑問であり、或は弊害の方が大なりはせぬかと心配されるのであります。

かく觀察して参りますと、政府を初めとし、役所といふ役所が皆な相應に骨折つて居るに拘らず、日本の社會は健全にもならず幸福にもならず、却つて年々歳々不健全となり不幸となつて行くことが判ります。これは眞劍に考へなければならぬ問題であります。

四 眞に復興せらるべきもの

一から十まで西洋流に考へ且行つたことが、現に見る通り面白くない結果を招いて居るとすれば従來の行方を改める外に途はない。即ち西洋を判断の標準となし、總てを西洋的に考へ且行ふことを止めるのであります。日本は約六十年間西洋を過度に崇拜し、西洋のものは總て善しといふ思想に支配されて來ましたから、自分ではそうと意識せずして言行が自然と西洋風になつて居ります。

従つて之を脱却することは非常に困難で、實にあの大地震が揮へる如き大威力を必要とします。私は大地震が破壊したのは、此の西洋的日本の外部であり、吾等が次で破壊し去らねばならぬのは其の内容であると信じます。之を破壊し去れる後に復興せらるべきものは、斷じて現在の如き文化的日本に非ず、純乎として純なる日本でなければなりません。

歐米崇拜の最も恐るべき點は、國民をして日本的自覺・日本の理想を失はしめることである。而も歐米崇拜は吾國の上流階級に行くほど甚しいのでありますから、それだけ日本的自覺を缺如し、それだけ日本的理想を意識して居りません。内治と言はず外交と言はず、今日の吾國の政治には不満に堪えぬ點だらけであります。その根本の原因は今日の政治家に雄渾莊嚴なる日本的理想が把持されて居ないからであります。ロシアは世界から惡魔の如く罵られて居りますが、ロシアの指導階級には燃ゆるが如き理想がある。その理想を振り翳して世界を征服しやうとする意氣込は敵ながら天晴れと申さねばなりません。彼等は其の奉ずる主義理想を最善のものとして信じて、之を世界に強制せんとして居るのでありますから、其の對外政策は常に積極的であります。然るに今日の吾國の指導階級には、何等雄渾なる理想がない。一切の邪惡なる思想と戦ひ、常に日本と言はず、世界を向上せしめ、人類を眞實の幸福に導くべき日本の理想なきが故に、ロシアを罵り乍らも常に受太刀であります。彼に優るものが儼然として吾に在るならば、もつと之に對して攻勢となり、積極的となるべき筈であります。

此の民族的自尊の點では、實に支那にさへも劣つて居る。支那人は叩かれても擲られても、心底では自分を世界第一の中國人と思つて居る。文明とは中華民族のみが有するものゝ如く心得て、外國人をば昔から夷狄即ち野蠻人扱ひであります。それであるのに昨今の日本人は、民族的自尊を失つてしまつた。日本の精神が世界第一等の精神であるといふ自信、少くとも第一等たり得る精神

であるといふ自信は、日本の指導階級の魂から失せ果てたのであります。それ故に日本國家の威嚴が日に／＼衰へて行く。従つて對支外交なども顔に泥を塗られた場合は、まあ／＼洗へば落ちる位ゝゝで辛抱するが、財布から銀貨一枚盗まれた場合は、血眼になつて腕をまくるやうな行方でありま

す。私は日本現在の政治家を以て、識見や才幹が足らぬとは決して思ひませぬ。智慧もあり腕もあり中には膽力もある人々が揃つて居ります。それなのに年と共に内外多難になつて、四方八方行詰りになつたのは、最も肝心なものが一つ缺けて居るからだと存じます。その肝心なものとは誠であります。而して誠が足りないのは、日本の理想を把握して居ないからであります。若し日本の理想に燃え、日本の世界に對する使命を切實に自覺して居るならば、もつと身に沁みて國民生活のことを考へ、もつと堂々と外國と交際しなければならぬ筈であります。滿洲に對する外交などでも、今日吾國が滿蒙に發展の基礎を確立することが、獨り君國のためと言はず、亞細亞のため惹いて世界のために最善の事柄であると信するならば、只今のやうな見苦しい態度は取れぬ筈だ。それが善事であるとの自信がなく、惡事でもあるかの如く考へて居るから、列強の顔色ばかり窺つて居る始末であります。私は決して列強を無視しろとは申しませぬ。眞心を以て彼等を説得するだけの努力は最も必要であります。然るに顔色は窺ふけれど、此の當然の努力さへ拂はうとせず、現に英米兩國の大使の如き前者は半年も東京で悠々として居るし、後者は大事の時機に歸朝させて居る。要するに

誠がないから萬事が眞剣でないのであります。智慧も才幹も具へて居り乍ら、之を存分に揮はうとしないのであります。若し政府が總選舉に臨む時のやうな眞剣味を以て外交に當るならば、對支問題の解決は決して困難でないが、今のやう時々思ひ出して力瘤を入れるぐらゐでは、到底仕事は覺束ないと存じます。

内治に就ても同様で、國民生活を身に泌みて考へるならば、西洋の眞似事で御茶を濁すやうな社會施設などに無駄骨を折ることなく、もつと適切有效な方策を實行すべき筈であります。非常なる使命を帯びて居る日本民族であるとの信念が強ければ、その民族の生活に就て嚴肅に心配するやうになる筈であります。自分等の政權争奪には眞剣になり死物狂ひになつて、有りつたけの智慧と腕と腹を働かすが、其外の事には一向本氣にならないのでは、國民が國家のことに一生懸命にならぬのは自然の勢ひであります。

政治家を初め、日本の指導階級は、昨今頻りに國民思想の悪化を説き、腐敗墮落を責めて居りますが、私は頓斗左様な意見に賛成出来ませぬ。思想は生活の影でありますから、生活の不安に伴ふて不健全な思想も生れますが、併し大多數の國民はいつの世でもこんなものであります。否な私は國民は全體として進歩向上の途を歩いて居ると思ひます。少くとも今日と徳川末期とを比較して、今日の市民や農民が、當時の『素町人』や『土百姓』に劣つて居るとは思はない。江戸末期の頹廢淫蕩の氣風は恐らく遙かに今日以上であつた。そのやうな『素町人』や『土百姓』でも、徳川幕府

に代つて維新の志士が指導階級となり、新興の意氣を以て之を率ゐて起てば、半世紀ならずして隆々たる國威を發揮するを得たのであります。況んや今日に於ては、若し日本の理想を堅確に把握せる人々が現在の指導階級に代つて、此の國民を善導し鼓舞するならば、必ず國運の興隆すべきを信じて疑ひませぬ。日本の指導階級は、國民を口先や筆先で善導する前に、先づ自ら改め、自ら責めねばならぬと存じます。

かくて眞に復興せらるべきものは『日本』であります。日本の精神・日本の理想であります。吾等はモボやモガの散歩を快くするために銀座通を復興したのではない。市民の膏血を絞りに私腹を肥やす議員の亂舞場たらしめるために市會議事堂を建てたのではない。切に正しくして強き『日本』を復興して、一世を支配する邪惡を打倒したいと存じます。これが今日私の諸君に申し上げたい要點であります。(昭和三年九月一日東京府主催震災記念講演)

第八 軍人と政治家よりの教訓

一 武門政治の國家的寄與

頼朝以來七百年、吾國では武士が軍人と政治家とを一身に兼ねて來たのであります。いはゆる武門政治とは、全國に亘りて恒久的に戒嚴令を布きながら、攻城野戰の精神を以て國民を治めたのであります。従つて其の官廳は即ち『城』であり、其の官吏は悉く『武家』であつたのであります。徳川時代に於ける町奉行、勘定奉行の如きも、今日の警察官や財務官などに比ぶべきものでなく、むしろ憲兵司令官や主計官に比ぶべきものであります。而して當時の武家は、各々その藩主に分屬し、藩主のために『戦ふこと』を以て最後の義務とせるが故に、公のために生死すべき生命を有して、私のために生死すべき生命を有たなかつたのであります。さればこそ徳川家康の好敵手として最後まで彼と戦へる石田三成は、常に『武士は君主より受ける物を残してはならぬ、これを残す者は盗人であり、使ひ過ぎて借金する者は愚者である』と言つて居た。これは武士が原則として君主の倉庫を有して自家の倉庫を有すべからざることを力説したものであります。まことに武士の生活は、武士全體の生活と分つべからざる一體をなし、一藩の武士は、悉く其の利己放縱の『私』を棄て、秩序峻嚴の『公』に歸一し、かくして實現せられたる統一組織の力を以て、内は藩民を治

め、外は他藩に備へたのであります。

この統制ある共同生活が、日本民族に寄與したる精神的訓練の價値は、實に非常なるものであります。武士に愛藩の念が盛んであつたのは、彼等が『全體』を尙び『統一』を重んじたる精神を示せるものであります。それ故に他日彼等が日本國の位置を知るに及んで、この精神を日本全國に擴充し、其藩を愛する心を以て此國を愛し、君公に捨てる生命を天皇に獻げたのであります。若し吾國に藩なるものなく、藩の共同生活なく、武士的訓練なかつたならば、恐らく公戰に勇にして愛國の情に濃かなる日本民族を見ることが出来なかつたらうと思はれます。

さて徳川幕府を倒した維新政治家は、政治の範を歐米に採り、歐米の制度に倣つて近代國家を組織することに努力したのであります。これは當然至極の行程で、もとより一點非難すべきところがありません。たゞ當時の政治家が、假令止むなき騎虎の勢ひなりしとは言へ、舊日本の政治的傳統に殆ど一顧眄だに與へず、舊幕の政治は徳川の政治なりとして、悉く之を打倒しやうとしたこと、並に歐米の組織制度を採用すれば、直ちに歐米に於けると同様の成績を擧げ得るものゝやうに考へたことは、之を今日より願れば明白に失策であつたと申さねばなりません。

二 軍人と政治家との分化

明治維新と共に先づ軍人と政治家とが分化したのであります。これは固より當然のことでありませぬ。而して明治日本の軍人は、ヨーロッパの軍制を採用しながらも、單なる兵略戰術以外に日本の

武人としての精神的鍛錬を重んじ、武士道の本領を護持するために非常なる苦心を拂つて居ります。それは全力を擧げてヨーロッパの組織を取入れ、且つ其の科學を利用したのであります。ヨーロッパの最も著しき特徴は、實に組織と科學との二つに外ならぬのであります。而して此等の二つを學ぶことに於て、軍人の如く徹底果敢なりしものは他にありません。それにも拘らず軍人は、その精神に於て飽迄も日本の武士たることを心懸けたのであります。日本軍隊の武勇は、疑ひもなく此點に由来するのであります。今や軍人の間にも、世間の指彈を受くる將軍を出だし、軍隊について幾多非難の聲を聽くけれど、之を全體として見る時は、軍人並に軍隊は今日といへども吾國の如何なる他の階級よりも遙に堅實であります。

三 現代政治の墮落

然るに政治家の場合は軍人の如くでなかつた。政治家も武士の分身ではありましたが、武士道ならば軍人にも委ね、明治維新以前に武士が必ず心懸けねばならなかつた爲政者としての人格的鍛錬を放棄したのであります。而して世間もまた政治家に對して特別な道徳的要求を有たなかつたのであります。従つて事務の才幹あり、法律制度に通じて居りさへすれば、誰でも政治家となり得るものゝやうに考へ、ついには『政治とは策略のことだ』とさへ信ぜられるやうになつたのであります。

いま假に軍人が收賄又は贈賄の嫌疑を受け、または之によつて刑に處せられたとすれば、如何に

名將の器であらうとも、其人は帝國の陸海軍から葬り去らなければなりません。然るに政治家の場合には殆ど左様の心配がない。巧に悪錢を捲上げることが、却つて政治家の譽れある腕とされて居るのであります。さり乍ら斯様な政治家が政治の局に當つて居ては、國民は決して安堵し得るものでありません。孟子が『君子なくんば以て治まるなし』と申したことは、少くも東洋に於ては千古不變の政治的眞理であります。日本國民は歐米人と違つて、外面的制度に従つて、器械的又は自治的に行動することに慣れて居りませぬ。言換へれば道徳と政治とを明確に分離させて居ないのであります。従つて法律制度を與へたからと言つて、自動的に立派な政治が行はれ、立派な國家が實現するやうなことは思ひも寄らぬ話であります。その利害得失は兎もあれ、ひとり日本と言はず東洋諸國に於ては、荀子が申したやうに『治人』ありて『治法』なしと言ふことが出來ます。治人ありて治法なしとは、政治上に於ても最も重んずべきものは政治家の人格であつて、決して法律や制度ではないといふ意味であります。それはヨーロッパに於ける『治人』よりも『治法』を重んずる思想と鮮明なる對立をなして居ります。然るに其のヨーロッパに於てさへ、高貴なる品性が政治家の重要な資格とされて居るのに、日本では殆ど此事がないのであります。

四 政治家としての鍛錬

舊幕時代の武士は、必ず經史の學を修むべきものとなつて居ました。經學は宇宙と人生との意義を教へる哲學であり、史學は治亂興亡の跡より歸納演繹したる政治學であります。昔の武士は是く

の如き素養を以て政治の實際に當らうとしたのであります。然るに今日の吾國の政治家は、稀有の例外を除けば、想を形而上の學問に潜め、心を道念の長養に凝らすといふやうなことがありませぬ。當代第一流の政治家諸公、打見たるところ多くは會社の重役たるに適はしいけれど、君國の大匠たるの徳を具へて居りませぬ。而も今日の國家生活に於ける社會現象は、實は複雑多端を極めて居ります。此の複雑多岐なる現象に當面して、よく全體的判斷を下し得る者でなければ、眞個の政治家たる資格は斷じてないのであります。而して其の全體的判斷の主たる要素を構成するものは、事務的判斷でなく、科學的判斷でもなく、廣義に於ける道義的判斷であります。これは精神的鍛鍊を經たる者のみが可能とするところであります。政治家は哲人でなければならぬとは、名高きプラトンの主張であります。プラトンを待つまでもなく、東洋思想は古來嚴正に政治家に對して哲人の素養を要求して居るのであります。私は現代日本の政治的墮落に、いろいろの原因を認めますがその最も根本的なものとして、政治家が精神的鍛鍊を無視し、世間もまた之を求めなかつた一事を擧げたいのであります。私は軍人と政治家とを比較して殊に此感を深くするものであります。等しく歐米の制度を採用しながら、軍隊は世界に誇るべき精銳無比のものとなり、政治は耻づべき腐敗墮落を極めてゐる。兩者の由つて岐るゝところ實に日本の自覺の有無強弱にあります。吾々の深く省みなければならぬことと存じます。

昭和八年九月十八日印刷
昭和八年九月廿二日發行

日本的言行
定價金參拾錢

不許
複製

著者 大川 周 明
東京市麻布區宮村町三四番地
發行者 狩野 敏
東京市麻布區宮村町三四番地
印刷者 狩野 敏
東京市豊島區西巢鴨二ノ三三番地
印刷所 合資會社 光文社
電話大塚(86)三九一八番

發行所 東京龜町區内山下町東洋ビル内
振替東京五二四八一番
神武會出版部

終